

なく烏拉地俄斯德に向つて出帆し去る。

第壹編 終

第二編 西比利亞

(一) 西比利亞の自然觀

(一)

わが乗れる交通丸は十二日午後六時小樽を發し、十四日午後二時半烏拉地俄斯德に到着しぬ。

余は順序として烏拉地俄斯德を記すの至當なるを知る、然ども余は之に先つて、余の研究せる所と、目睹耳聞せる所とにより、西比利亞の自然及び社會等大體に渡るの觀察を掲げんとす、蓋し西比利亞の自然を外にして、西比利亞の社會を語る能はず、歐亞兩大陸に跨る自然の現象を極めずして、また露國人を解釋する事難し、大陸の自然は實に露國人を生み、また西比利亞的型の露國人を生めり、思

ふに其自然と個人及び社會との密着の關係を有せる適例を表示せる
西比利亞の如きはならず、西比利亞の都市を見、西比利亞の社會を
見んとするもの、是非ともまづ知らざるべからざるは西比利亞の
天然なり、余は實にこの意味においてまづ『西比利亞の自然觀』に
筆を染めんとす。
西比利亞は種々の點において、最も驚ろくべき國なり、殊に天然に
おいてその最も驚ろくべきを見る、若し科學の開けたる今日にあら
ざりせば、余が語らんとする西比利亞の驚ろくべくまた怪奇なる自
然に對して、虚構妄誕なりと排斥せざるの日本人はあらざるべし、
西比利亞の天然は日本の天然に比して實に斯の如き絶大の相違をな
せり。
西比利亞は北緯四十二度二十三分より起りて七十七度三十四分に及

び、東徑六十度のウラル山より百九十度の白令海峡に至る、東西實
に千七百餘里に亘り、南北九百餘里に及びその面積亞細亞全洲の三
分の一を占む、世界にあつて既に驚ろくべきの大邦土といふべし、
余の説んとするは、即ち斯の如き驚ろくべき大邦土の天然にあり。
西比利亞は露國が無邊の寶庫なりと稱し、世人もまた之に雷同する
所の大陸なり、果して無邊の寶庫なりや否やは、余のこゝに説んと
する處にあらざれども、地勢すべて南より北に傾斜し、直ちに北氷
洋に接して一もその酷烈の北風を防ぐべき屏障なく、南には却つて
アルタイ、サヤン等の連山ありて、温暖なる南風を遮斷し、西には
ウラル山ありて西南風を妨げ、東にはスダノタイ山ありて、太平洋
より來る蒸氣を遮ぎり、寒烈の地更に一層の寒烈を加へ、人類の棲
息に適するは僅にその七分の一に満たず、世界の長流たるレナ、

エニセイ、オビ等の如き、流域皆一千餘里に及び、日本全洲を縦貫して、再び折返り来るも尙餘りあるべきほど驚ろくべきの大河が、幾千の支流を合せ、縦横に平野を貫流し居れども、その文明に寄與する所は極めて少なく、名は即ち世界の大邦土なれども、その實甚だ大なる利益を收むる能はざるの地たるは争ふべからざるの事實なるに似たり。

西ベリアはその地勢と氣候とにより之を四分し、或は三分す、余は凍土帯、森林帯、曠野帯の三部に分つものに從つて、暫らくその自然を見んと欲す、凍土帯は北緯六十三四度以北にして北氷洋に面せる空漠の地方を稱し、その面積實に西ベリア全洲の三分の一を占め、森林帯は北緯六十四五度以南五十五度を限り、其面積殆ど全洲の二分の一を領す、曠野帯は即ち残る六分の一を指せるなり。

乞ふ余をして此等の自然が表現せる大觀を説かしめよ。

(三)

世界の終滅が遂に學者の空論にあらず、その終滅時における萬有の光景極めて慘澹たる事が、小説家の空想のみに止まらずとせば、その寂滅期に入る第一歩の光景は、必らずしも之を架空の想像に待つを要せず、直ちに西ベリアの凍土帯において目撃し得べし、西ベリア全洲三分の一に跨るの凍土帯は、實にかくの如く荒涼悽慘の光景に満てるなり。

凍土帯はその地底百尺乃至七百尺の間永劫に氷結し、地上には全く一木を生ぜず、加ふるに地勢卑低にして、風力常に強く、北氷洋の波濤洶湧して岸を噛むもの、直ちに氷結して水陸の境界を辨別する事能はず、諸川の上流より流れ来るの淤泥、氷上に溢れて冰山を築

けるもの、夏季の始に至りて少しく融解するや、流水三丈の高をなし、その中屢々前世紀動物の遺骨を露出して氷岸の間を流下す、本年露西亞のヘルツ博士が氷層中より、全軀悉く完備し、その肉少しも腐敗せず、口の中には尙青き野菜を含み居たる八千年前の巨獸マンモスの屍骸を發見したりといふもの、實に斯の如きレナ河の沿岸にあり、諸川の沿岸及び北氷洋の海岸は到る處この巨象の遺骸を埋藏せるなり。
凍土帯は夏期二三月の間その表面のみ僅かに融解す、この時空漠涯際なきの野は、滿地悉く沼となり澤となり、野苔その上を蔽ひ、紅覆盆子こゝに密生し、數萬の水禽群り來りて、かの野苔を食ひ、この紅覆盆子を啄む、遠く丘を望み湖を望めば、白鳥、鴨、鵝、鷓、鵠の屬隙もなく充滿し、水色を辨せず、草色を辨せず、形美はしき馴

鹿は水禽に伍して野苔を食ひ、熊、羆、白熊、豺、狼の類はまた南方森林帯を出て、等しく此地方に來り、水禽及馴鹿を餌として食に飽き、悠々として、無人の一大樂園を形作る、然れども斯の如き樂園の生命は甚だ長からず、既に八月に至れば嚴寒此帯に侵し來りて、鳥獸は一齊に此樂土を退かざるべからず、鳥獸一たび去れば天地倏忽異色を呈し、空結ばれて濃霧起り、或は飛雪紛々として千里の野を掠め、十月に至つて溫度ますます下り氷點下四十五度に至る。
之に加ふるに凍土帯をして最も慘憺たらしむるものはその長夜にあり、北緯七十度以北にあつては五月中旬より七月中旬に及ぶまでは太陽常に地平線上を周行して嘗て没する事なく、此間即ち凍土帯の樂園を形作れども、その他の時季にあつては、唯暗憺たる黄昏の色をのみ見て太陽を見ず、東部地方の如き日光はスタノワイの峯頭を

のみ照せど、嘗て地上に及ばざるもの數十日、而も霧と雨と交々臻り、雲霧連月天際を蔽ふて霽れず、乾坤晦澁して萬有悽慘を極め、刻一刻に魔界に墮落しつゝ、十一月に至つて遂に長夜に變じ、これより二三ヶ月の間だ天地冥々としてすべて黒闇々の裡に葬むらる、この時に當つてや、酷烈の寒氣はその極點に達し、金を裂き、巖を壞り、岩石をも吹飛すべき大颶風雪を伴ふて吹荒む事長き時は二週日、寸時もその勢を休せず、此季節間においてまた自然のイルミチーシヨンにして、天地の大觀たる北光屢々表はれ、半天大輝光を點じ七彩暗中に炫耀す、幾百のサイチライト、幾千萬のイルミチーシヨンを以てするも、また以て北光の美とその壯觀とに比すべくもあらず、あゝこれ實に世界寂滅時において最後の暗を飾るべき點火裝飾にあらずして何ぞや。

地下には累々として八千年前の動物を埋め、地上には幾萬千年の後に來るべき天地寂滅の大活畫を表現す、かくの如きは實に西比利亞における凍土帯の光景なり。かくの如きの地素より人類の棲息に適せず、こゝに棲息せるものただ多數の馴鹿あり、エスキモーの如き土人あり、更に憐れむべき露國流罪人あり。

(三)

凍土帯の限界たる北緯六十三四度以南大凡五十五度の間に横はる絶大の地は則ち森林帯なり。銀松、新羅松、落葉松、樺、榛等の喬木密生し、その長大の樹幹は蘊々として天空を凌ぎ、その重密の技葉は鬱々として日光を遮ぎり千古の老木腐朽せるも、尙倒るゝ能はずして樹間に中立せるあり、

陰鬱暗澹として晝尙暗き大森林は隨處に之を見出すべく、無數の沼澤蕭條としてまた此間を點綴す、豺狼、黑熊、野猪、野猫、黄鼠、黑狐、黑貂等の野獸は到る所に徘徊し、川には魚介を捕へ、野には麋鹿を屠り、以てその食に飽く。

沼澤多きが故に空氣濕潤にして、夏は夥しく蒸氣を發生するも、風力林間に及ばざるが故に、瘴癘の氣を吹拂ふ事能はず、蚊、蛇等の毒虫夥しく發生し、家畜を害し野獸を苦しめ、豺狼熊の如き猛獸をすら驅逐して遠く凍土帯に遁逃せしむ、土人の此間にあるもの隙間もなく手足を包み、顔には網を蔽ひ僅かにその害を免かる、此地方に馴れざるものたま〜至る時は往々蚊のために螫し殺さるゝ事ありといふ。

若夫氣候の寒烈なるに至つては殆んど凍土帯と擇ぶ處なく、一年の

平均溫度氷點下を下り、夏季の溫度と雖も十四度乃至十五度に過ぎず、嚴寒に至れば氷點下四十度乃至四十五度に降る事珍らしとせず且その冬季は實に半年以上の久しきに亘る、然れどもその嚴冬において空氣の著しく靜穩を呈するは、實に西比利亞における奇現象の一なり、多くの日において碧空晶瑩として透徹し、その風全く死するに至つてや、一片の鴻毛も飛散せずして地に墜ち、空氣が音響の波動を傳ふるの穎敏なる驚ろくべきものありて、床上に針の落る音も數室を隔て、聞くべく、犬聲人語信ずべからざるまで遠隔の地に達す、萬象寥廓として、時に亭々たる樹木、突兀なる巖石、磊塊たる地盤の寒氣のために破裂する音響、近きは爆裂彈を投じたるが如く、遠きはよく數里の彼方に聞え、鳥鵲の晶瑩たる空中を飛翔するもの、恰かも慧星の光芒を引くが如くに、その尾より長く一條の白

氣を引き、遠く望めば白虹の空に横はるが如く、雲烟の斜めに靡くが如し、何等大寂寞大蕭殺の光景ぞ、これ實に西比利亞大陸に來つて始めて見るべきもの。

かくの如きの嚴寒時においては、萬有悉く凍合せざるものなく、樹幹の如き鐵と同じき硬固軀に變じ人もし誤つて手を觸るゝ時は、宛がら赤熱の鐵に觸るゝが如くにその表皮を剝離し、甚しき凍傷を起さしむ、森林に棲むの野鹿は千百群をなし暖を取らんがために肩と背と相摩し、互ひにその中央を争ひて膺集し、犬は積雪の中に深き穴を穿ち棲み、頻りに行旅の客に吠ゆ、然れどもこゝに住するの土人に至つては、毫もかくの如き寒威を恐るゝの念なく、却つて空氣の靜穩なるを喜び、或は獸獵を試み、或は旅行を企て、以て長き冬の消閑となす、たゞそれ空氣は多くの場合において靜穩なりと雖も

時にまた猛烈なる北風の起る事無きにあらず、もし此時に當つて野外にあれば、如何に襜褕を重ねるも血液血管中に凍結して、死の運命を免るゝ事難きが故に、土人は只家居して火を焚き僅かに凍死を免るといふ。

あゝかゝる極寒の地只森林の發育に適するも、素より耕作に適せざれば、森林帯における農業の發達は素より期すべからず、然れども近時金礦の發見あり、ために森林帯に住せるもの今日既に七十萬の多きに上れりといふ、露國果してこの不毛の森林帯を化して、大寶庫となすを得るや否や。

(四)

北緯五十四五度以南の地を曠野帯と稱す、即ち西比利亞の首腦部なり。

世人の西ベリアをいふもの、一に曠野帯における西ベリアを指さすに外ならず、西ベリアが露國の寶庫たるべきは、實にこの曠野帯を有するにあり、すべての都市は此帯に向つて建設せられ、凡ての事業は此帯において企畫せらる、移住民の移植さるゝもこの帯にあり西ベリア鐵道の通過するもこの帯にあり、而して露本國の風土氣候と更に擇ぶ處なきも、また實に此帯にあり、西ベリアの自然が西ベリアの社會に及ぼせる感化力の、如何に大なるかを知んとするものは、來つて曠野帯の自然を見るを要す、これ獨り西ベリアの社會を知るのみならず、又以て露國の社會を知る所以の途と知すや。曠野帯と森林帯との區別は、森林帯と凍土帯との區別の如く、判然たる事能はず、曠野帯と雖も必らずしも空漠たる曠野のみならずまた間々大森林の混ざるあるなり、只兩界の争ふべからざる差異は

此帯の高温度を有し、彼にあつては穀類の稔熟殆んど望みなきにかへ、これにあつては盛に發育しつゝあるの點にあり。曠野の大なるものバラバ、ミスシン、プラト等あり、その大なるものに至つては廣袤數百里に亘り、漠々としてその涯際を知らず、概ね地味豊饒にして農業牧畜に適すれども、バラバ曠野は全然泥土質にして、春季盛に水分を吸収せるもの、夏季は日光を受けて腐敗し、濃厚な蒸發氣を發するが故に、瘴癘の氣郊野に充滿して、常に人類の棲息に害あるのみならず、野禽もまた避けて來り飛ばず、蒸發氣の草の葉に置もの露となり、野獸の之を食するもの往々疾疫を發し悪性の流行病を來す事あり、西ベリアの時疫これなり、西ベリア中にありて氣候最も溫和なるバラバ曠野が、斯の如く人類の生活に適應せざるは實に露國の災なりといふべし。

第二編 (西ベリアの自然概)

然れどもその泥土質なるは獨りバラバ曠野のみにあらず、西比利亞の地悉く多少の泥土質にあらざるはなく、土質極めて疎鬆にして、毫も砂石を混ぜず、乾燥する時は塵の如く軽く、雨ふる時は田の如き泥濘を生ず、支那大陸及び我北海道の如き亦稍斯の如き土質にして風吹く時は盛に砂塵を揚げ、雨ふる時は最も泥濘を極むれども、之を西比利亞の都市に比する時は實に物の數ならざるを知る。

ヘンリー、ノルマン氏は其最近の著書『全露西亞』に西比利亞最大の都市たるイルクツクの道路を評して "Ankle deep in dust or knee-deep in mud" (塵埃は脚踝まで深く、泥は膝まで深し)となし、且氏が到着したる翌日の新聞紙において、二人の學校歸りの小兒が、道路の真中に倒れ、辛くも通行人に助けられて溺死を免れたるの記事を見たりと記せり、これ豈驚ろくべき事實にあらずや、殆んど人をしてその

作話にあらざるなきやを疑はしむ。

然れども西比利亞の地質の特色は實に斯の如し、余は烏拉地俄斯德において、如字義に黃塵萬丈の砂塵が太陽の面をまで黄色ならしむるの偉觀(一)を経験したる翌日、幸ひにもまた烏拉地俄斯德の雨を経験するの榮を擔ひ得たるが、半日にして前日大砂塵を擧たるの街路は、所謂膝深の泥濘となり、余は馬車によりて大厦高樓の櫛比せるその大通りを通過したるに、ニコライ寺院の下にてはその泥の深さは事實上において馬の膝に達し、車輪はその八分を没せるを目撃せり、かくの如き道路はたしかに小兒を溺れしむるに足る、而して卅分許馬車を驅り歸り來れる余と余の友とは、カフスとカラーにまで汚泥の點々たるを認めたりき。

余はまた最も近き未來において沿海州の首府たるべきニコリスンの

道路をも見たり、その凸凹高低の甚しき、日本の如何なる田舎に至るもかゝる悪道路を見るべくもあらず、且つ道路の中央處々に存する泥濘には豚の頻りに捏返し、鶯のグクグウと食を獵るを見たり。斯の如き悪道路を有せるを以て必ずしも西比利亞の野蠻を説く事勿れ、是實に西比利亞に於る地質の特色を説明するものなればなり。

(五)

若夫曠野帯の風光に至つてはその單調なる、凍土帯森林帯の單調なるよりも寧ろ甚しきものあり、かの萬頃の波浩々洋々として四望涯際を知らず、航行連日、日は常に水より出て、水に入るを見る、これを太平洋の風光なりとせば、満目の郊野空漠蕭條として、鐵路幾日の旅、たゞ同一の眺望を繰返せる西比利亞の曠野帯は、最も遺憾なく大陸的風光を發揮したるものにあらざるなきか、眞に人をしてそ

の單調の絶大なるに驚殺せしむ。

たゞそれ單調なるに拘はらず、この單調に多大の變化を與ふるはその激甚なる季節の變轉にあり、激甚なる季節の變轉は、郊野の光景に激甚なる變轉をなさしめずんば止まず、四月より五月の候に至り郊野の表面を蔽へる氷雪の一時に融解し始むるや、下萌出る春草は春日の和煦たるにつれ、驚ろくべき發育を遂げ、見る／＼寸に達し尺に達し、高さものは數週にして丈に及び、六月に至つては早くも蒼をつけ盛んに花を開き、紅黄白紫繚亂として野を飾り、以て八月の末に及ぶ、故に西比利亞においては春夏秋の花を區別すべきものなく、福壽草と芍薬と百合と撫子と、女郎花と桔梗と、只僅かに二三ヶ月の間に前後して、一齊に開き、また一齊に謝し去る、この時の光景に至つては、何ものも以て西比利亞の野の榮華に比すべくも

あらず、或は雪の解去ると共に一帯の原頭福壽草の花開きて數里に亘り、さながら黄金を敷けるが如きあり、此間また鶴、雁の類の南方より歸り來りて水邊に悠遊せるを見るべく、或はまた數十里の間滿地悉く野生の芍藥開き、眼界の及ぶ所紅白の花ならざるはなく、異香馥郁として空中に満ち、天樂とも聞くべき無数の告天子の聲の長閑なる春日に和せるあり、實にこれ天地間の一大樂園、人をしてその人界のものにあらざるを疑はしむ。

然れどもこれたゞ二三ヶ月の間のみ、やがて朔風原頭を拂ひ、落葉林の木葉、郊野の草を紅黄色に染めなすと見る間も疾し遅し、春時においてその發育の速かなりしが如くに、木の葉と草と驚ろくべき速度を以て凋落し始め、週日にして空林生じ枯野現はれ、鳥は皆南方に去り、動物は悉く影を潜めて、その穴に冬籠の用意を急ぐ、之

を暫らくにして飛雪紛々、一朝にして千里の野を埋め去れば、極目の風光何の變化なく、何の趣味なく、曠野帯を擧て氷雪の下に没し陰鬱暗憺たる長さ冬と長さ夜とは、荒涼たる西比利亞の天地を鎖して半年の長さに至る。

かくの如くにして西比利亞の自然は、その露國本土におけるが如く毫も中庸なくまた調和なし、直ちに極端より極端に走る、大陸的風土の特徴として、夏は殆んど熱帯の熱を感じ、冬は寒帯の寒を覺え中和の候なくして冬より夏となり、夏より冬に移る、昨日まで萬丈の黄塵を飛ばしたるの市街、若くは泥濘膝を没したるの道路も、一日の中に白皚々の銀世界となり、凡ての塵埃凡ての汚泥は全く清められ、昨日の馬車は橇と變り、衣服は毛皮と變り、宛がら豫言者の杖を加へたるが如き、別天地を現出すること普通にして、かの黒龍

江の水、烏拉地俄斯德の灣等の如き前日まで船舶を通じ居たるもの一夜にして車馬を通ずべき堅氷を結び、波は打上られたるまゝに波形を留めて氷結する事珍らしとせざるなり、かくの如き瞬間の凍結は殆んど人の信ずる能はざる所ならん、あゝこれ實に西比利亞の特色なり、また露本國に通ぜるの特色なり。

凍土帯に入つては氷塊の外何ものをも見ず、森林帯に入つては森林の外何ものをも見ず、曠野帯に入つては曠野の外何ものをも見ず、たゞ絶大のみあつて調和なく中庸なく、その氣候は直ちに積極より消極に走り、三四ヶ月を除くの外は只單調無味なる自然に飽き、半年の久しきに亘りて氷雪の中に盤居せざるからざる西比利亞の住民は、そも如何なる感化を其自然より受つゝありとするぞ。

(二) 西比利亞の社會觀

現今西比利亞の人口は五百餘萬を有し、その中四百五十萬人は實に露本國より來れるものとす、故に西比利亞の社會を觀察せんとする前には、まづ露國人の解釋を試みざるべからず。

踏む所は漠々たる大陸、視る所は荒涼たる山河、氣候は峻烈にして積極より消極に走り、夏において黄金を溶すの炎熱あり、冬において水銀を凍らしむるの酷寒あり、春風一たび渡れば野花燎亂として妍を争ふも、朔風漠に振へば蓬斷え草枯れ、窮陰互寒、千里に凝閉して、鷺鳥も飛んで下らず、猛獸も影を潜めて出ず、凄其たり、また慘憺たり、あゝ斯の如き自然の搖籃の中に育て上られたる露國人の型は即ち如何。

露國人を説くものは、その一人にして多くの矛盾と多くの衝突を有せるに驚ろかざるものなし、最も輕卒にして最も沈着、最も快濁にして最も陰鬱、最も溫柔にして最も險惡、かくの如き反對の特質を一人に併せ有し得るの國民は恐らく露國人以外にその類を求むる事難かるべし、彼はその性情において常に極端より極端に走る、右せざれば左、前にあらずんば後、彼にあつては中庸なく、また調和なし、露國が列國間における一個の怪物たるが如くに、露國人もまた實に人類學上の怪物たらずんばあらず。
露國人は常に一人にして兩極端を持つのみならず、個人も又極端と極端とより形くらる、愚者にあらざれば智者、紳士にあらざれば破廉恥漢、正直ものにあらずれば横着もの、小兒の如く無邪氣なるにあらざれば、惡魔の如く殘忍なるもの、個人間に於て品性の相違

を見る事露國人の如く甚しきはなし、否管に個人が極端と極端の集合たるのみに止らず、その社會もまた實に上流と下流とのみあつて中流を有せざるなり、上流はどこまでも不生産的にして、下流はどこまでも奴隸的なり、而してその中間を形作るものは只一の空虚のみ、上には唯絶對的專制あり、下には唯絶對的服従あり、かくの如き極端と極端との集合より成る社會の状態は知るべきのみ、富むものはいよく富み、貧しきものはいよく貧しく、伸ぶるものはますます伸び、壓せらるるものはますます壓せられ、逸樂に耽るものは長夜の宴を張りて尙足れりとせず、勞働に苦しむものは晝夜を分たずして尙食に餓ゆ、上下の懸隔いよく甚しく、幸不幸の差益大にして、猶社會黨出でず、虛無黨出でずと云はゞ、これ露國の全社會を擧て、腐敗墮落の底に陥れるの秋にあらずして何ぞ。

かくの如き上下の差は國民の容貌にまで、その特色を印せしむ、上流に位せるものは最も得意の容貌を有し、下流に沈めるの農民は最も陰鬱の容貌を有す、然れども下流民の陰鬱なるは必ずしも社會の逆境に立るが故にあらず、實に自然が彼等に與へたるの印象なりとす、その長さ冬と長さ夜とのために生活の大部分を不潔陋隘なる屋内に蟄居せざるべからざる運命を有する彼等が、その自然より陰鬱の烙印を印せらるゝは寧ろ當然のみ。

峻烈にして苛酷なる天然はまた彼等に深刻の性質を附與せずんば止まず、深刻にして殘忍、その生存のためには爲さざるなく施こさざるなし、往々人をして戰慄せしむべき大慘劇を演出して顧みざるはまた彼等の特色なり。

寂寞たる天然はまた奪ふべからざる悲感を彼等の心靈に點せずんば

止まず、只それ露國における寂寞は實に畏るべき崇高に充るの大寂寞なり、こゝにおいてか寂寞はまた彼等の宗教心を挑發せずんば止まず、常に悲感に満ち、常に迷信を有せる露國民はかくの如くにして作られたり、露國の思想界に神秘主義の横はるもこれによる、露國の詩歌に悲哀懷疑の充てるも之に依る。

露國人の頭腦は東洋的なりとは西人の説く處、然り多くの點において彼スラブは寧ろ亞細亞大陸人に酷似せり、その不規律なる點において、その不潔を意とせざる事において、愚民の多き事において、專制的なる事において、賄賂の公行せる事において、その殘忍の天性を有せる事において、その盗心の盛なる事において、時にまた大いに無邪氣なる事において、風俗の頹廢せる事において。

斯の如き人種が西比利亞において形作る社會の狀態は如何、余は項

を分ちて一幅百鬼夜行の圖を活現せしめんとす。

(三) 西比利亞の暗黒面

(一)

“To Siberia!” (西比利亞へ!) 是は實に久しき間露國人を戦慄せしめたるの聲なりき、否啻に露國人を戦慄せしめたるのみならず、實にまた他の歐洲人をも戦慄せしめたるの咒符なりき。

近き頃まで烏拉爾の此方は妖氛暗濘たる恐ろしき大陸として知られ歐洲人の腦裏には千古の雪終始解くるの期なく、數月の間は黒暗々の裡に葬むらるゝの土地とすら想像せられたり、而して獨りかの神聖なる露帝の生命に危害を加へんとする虚無黨が、絶えず此地に護送せらるゝのみならず、普通の重罪犯も露國內においては刑を加へ

られずして、悉くこの暗黒互寒の地に送附せられ、極めて少數を除くの外は生きて再び還るものなければ、定期の汽車がこれ等の罪囚を烏拉爾の境に送り届くべく、その莫斯科を發するに當りてや、彼等の妻子親戚知己は泣いて列車の後を追ひ、公衆もまたその罪囚たる事を忘れ、只彼等が生ながら地獄に葬むらるゝの慘なるに激せられ食物と金錢とを以て彼等の後に走れりと傳へ、更に烏拉爾を越えて西比利亞の内地に入らんか、積雪脛を没せる無人の野には、かゝる追放人がその生ながらの地獄に急ぐべく、殘忍にして一點の情を解せざるユサク兵士に鞭打れ、長き列をなしてすべて黙々として通過し、只時に堪へ得ずして發する罪囚が呻吟の聲と、足に搦める鐵楯の相觸れて發する録々の音とが圓寂たる天地に反響するを聞くのみとなす、斯の如きは最も人の空想を激せしむる所以にして、また

實に小説家の好んで題目とせし所なり、殊に露國人に對して先天的憎惡心を有せる索遜人は西比利亞における殘虐の物語を好んで談話の料となせるが故に、この荒涼たる大陸に關してますます不吉の印象を世人に與へたるは争ふべからざるの事實とす。

事實は只それ誇大されて傳はれり、西比利亞の真相は不透明なる帷もて蔽はれたり、かくの如き帷の漸く取除かるゝに至りたるは實に最近西比利亞鐵道の開通後でありとす、西比利亞の真相が漸く世人に誤解されざらんとするは何等の幸ぞ。

然れども余は西比利亞の觀察に對して遂に甚しく樂天的なるを得ざるを悲しむ、余は必らずしも西比利亞における殘虐の物語を繰返さんとするものにあらずれども、かの北清事件の際に當り、ブラゴエチエンスクに居住せる支那人の老幼男女七千人を一齊に黑龍江畔に

追やりて之を突落し、泳ぎ得ざるものをば悉く溺れしめ、泳ぎて對岸に免れんとせるものをば悉く銃殺したるグリープスキ軍の如きを、知事若くは總督として頂き、到る處に充滿せるユサク兵士の、喜んで斯の如き將軍の命令を待ちつゝある西比利亞の地は、樂天家ならざる限り、甚だしく愛好すべき樂園にあらざる事を認めずんばあらず。

然れども余は敢てかくの如き兵士と將軍とを説きて彼等に累を及ぼさんとするものにあらず、西比利亞の地が最も人を戰慄せしむるに與つて力ありたるブリズンランド(牢獄地)として、今日の現狀が猶且人の空想を激するに足るか、詩人の好題目たらしむるに足るか如何を語らんとするにあり。

(二)

世界の如何なる國と雖も、恐らく西比利亞の如く獸的慘劇が容易に演ぜらるゝ處なからん。

最近年まで露國政府はその罪囚を悉く西比利亞内地の牢獄に送り、若くは之を追放し來れり、彼等はその刑期満るも少數者を除くの外再び烏拉爾を越ゆる事を許されず、またその少數者と雖も歸國の旅費を給與されざる限りは、素より千里を隔つるの本國に歸り得べくもあらず、而してその偶歸り得るものあるも、長老組織をなせる露國の村落は斷じて彼等の再び土地に住するを許さず、かくの如き事情の下に、一たび西比利亞に送られたる者は、實際に於て慥かに生きて再び還るを得ざるが故に、止むなく西比利亞を以て墳墓の地と定むるの、哀れむべき運命を擔はざるべからず。

かくて西比利亞は事實の上において全く牢獄地となれり、千八百九

十八年に露國より西比利亞に追放されたる罪囚は男七千九百六人、女三百十四人、この罪囚に從ひ來れるもの男一千六百八十三人、女三千二百七十五人あり、之を計上する時は一萬三千百七十八人に及ぶ、この人員を以て素より毎年西比利亞に追放せらるゝもの、平均數となす能はざるも、また以て年々如何に多くの罪囚と、その血縁者とが、西比利亞の地に運ばれ來りしかを察するに足らん。更に露國が西比利亞を流罪地と定めたるは十七世紀の昔にして、今日まで四世紀に渡りて絶えず罪囚を護送し來り、殊に十九世紀においては全然流罪人を以て西比利亞を拓殖するの方針を取り、護送に次ぐに護送を以てし、盛んに罪囚を西比利亞に送りつゝあるたる事實を知るものは、如何にまた西比利亞の地が此等の罪囚及その子孫を以て充るに至れるかを察するに餘あらん。

然り、西比利アの人口五百萬中少なくともその二百萬は、罪人若くは罪人の子孫なりとして數へらる、罪人の子孫は素より罪人にあらず然れども何人か敢てかくの如き種類の人民より尊敬すべき良民の摸型を求めんと望むものぞ。
露國にあつて離婚は決して容易の事にあらず、只夫の西比利アに追放せられたる時のみ、其妻は容易に離婚を請求するの權利を有す、然れども若し夫に従つて烏拉爾を越んと欲するものあらば、露國政府は妻にその旅費のみを與へ子あるものはその子を伴ふを許し、子には些少の養育料を給す、これ神聖なるツァールの命令としては、甚だ寛大に失するを恐ると雖も、婦人の殖民を熱望せるがためには實にまたかくの如くなすの必要あるに出るものにして、必らずしも仁慈のためにあらざるを知るべし、かくて單に一地區を限りて追放

されたるもの、妻は、なほ夫と共に同棲するの樂を得べく、牢獄に投ぜられたるもの、妻は、獄舎の附近に住みて、獄衣の裁縫洗濯等によりて辛くもその口を糊し、子等と共に幾度か飢寒に叫びつゝ、氣長く夫の出獄を待たざるべからず、かくの如くにして牢獄の周圍には一個憐れむべきの寒村形作らるゝを見る、かくの如くにして西比利アの罪囚は次第に其子孫を繁殖せしめつゝあるを見る。
世人は西比利アの追放とし云へば必らずまづ虚無黨を聯想す、然れども虚無黨の追放さるゝものは極めて少數のみ、普通罪囚の百分の一にだも充ざる少數のみ、もし國事犯人の子孫を以て西比利アの地を繁殖せしめなば、西比利アの文明は必らずや非常の進歩を見たるならん、然れども事實において虚無黨の子孫が甚だ多く西比利アの繁殖に與らざるは露國のためにまた何等の不幸ぞ。

西比利亞の罪囚を説んとするに當りては、必ずや露國の下流民がその血管に野蠻犖猛なる鞣韃人の血液を混ぜる事を忘るべからず、故にその犯罪に至つては往々獸的にして文明人を戰慄せしむるものあり、かくの如き罪囚が四世紀に渡りて護送され來り、漸次に形作られたる西比利亞の社會は抑も如何の獸的慘劇に満てりとするぞ、乞ふ事實をして之を語らしめよ。

(三)

かくの如き鞣韃人の血を混ぜる犖猛殘忍の重罪囚を、野に放ち來れる西比利亞の内地に、獸的慘劇の行はるゝは寧ろ當然のみ。彼等は法に於て其定められたる區域を出るを許されず、若彼等に於て逃走せんとする時は、その附近に住へる正直なる百姓を殺し、その衣服を奪ふて己が着衣と着換へ、さるが上にその旅行券を奪ふて

立去らざるべからず、何となれば神聖なるツアールの民は、何人とも雖も旅行券を有せざるものは、遠慮なく牢獄に投ぜらるゝの運命を有すればなり。

かくの如き慘劇を伴ふ罪囚の逃走は、西比利亞においては、少しも珍らしき事にあらず、また實際彼等は逃走を企だてざれば餓死するを免れざるなり、何となれば露國の官吏は彼等に金錢を給與せず、また職業をも與へざればなり。

彼等の多くは勞働よりは奪掠を擇び、劍を以て地を掘起さんよりは刀を以て人の咽喉を抉らん事を擇ぶ、西比利亞は實に斯の如くにして殺人者と盜賊の横行濶歩せる檜舞臺となれり、彼等の演ずる兇行は、すべて亞細亞大陸的式に出づ、彼等は他人の物を奪はんとする時、その奪はんとするもの、多少に拘はらず、之を奪ふの前に必ら

ずまづ他を殺害す、その殺害を加ふるや、十中の七八は不意に襲ふを常とし、正面より攻撃する事なく、物陰に隠れ、その過るを待つて後より咽喉を締つけ、若くは棍棒を以て只一撃に其脳天を割り、或はその胸を刺す、先づ始めに旅人を呼留めて脅迫し、悠々と名乗を擧てタンカを切るが如き日本式は全く流行せず、且彼等の残忍なる、萬一殺害し終りてその懐を檢めたる後、僅かに十錢を見出すに止まるも、決して無益の殺生をなしたりとは悔まず、若し再び日本人の例を假しめば、かゝる場合においては、如何に弊惡の兇徒と雖も、必らず一片悔悟の念の萌し來るを禁ずる能はざるならんに、彼等にあつては毫も良心の閃影を認めず、否その十錢を得んがためにも一杯のオホツカ酒を飲んがためにも、猶敢て容易に殺人を行へるなり、こゝに至つては純然なる野獸の本性を曝露して餘あるも

のといふべし。
日本においては貧民ほど生命の安全なるものは無しと知らる、然る米鹽一升の値のために、生命を奪はるゝが如きは斷じて無き所に屬すればなり、然れども西比利亞にあつては、只僅に十錢を有するが故に、猶且生命の安全を維持する事能はざるなり、天下豈斯の如く危険の處あらんや。
西比利亞においては如何なる所にも、一週間に一回以上殺人事件の演ぜられざる地なし、イルクツクの如き、かゝる罪囚の最も多く集中せる都會にあつては、一週間甚しきは一ダスの殺人事件を見る事ありと稱せらる、この故に西比利亞の如何なる都市を問はず、そこに住へる尊敬すべき良民にして、獨りよく暗夜の歩行を敢てするものなし、少なくとも夜拳銃を携へずして歩行する事を夢みるものす

らなし、その家宅と雖も夜に入れば寢息を窺ひ居るもの、侵入を免れざるが故に、往々その眠に就く前に拳銃を窓より放ちて用意あるを示すものありといふ。

露國政府は殺人鬼を刎ね、又は幽囚する代りに之を西比利アの野に放つを最賢き政策と考へ來りたるなり、歐露にありて一人を殺したるものは、西比利亞に來りてよく數人を殺し、猶且警察の手を免かるゝを得べし、露國の官吏はなるべくたけ彼等に寛典を與ふる事を以て、實に西比利亞拓殖の第一歩と信じ、以て最近に至れるなりき。

(四)

マダム、オィゴルマンなる貴婦人が昨年西比利亞を旅行したる記事の一節に曰く『イルクツクに到着したる夜の事なりき、妾は臥床に

入りてふとまどろむと思ふ間もなく、寢室の外に當りて凄まじき物音と、亂發せる拳銃の音とによりて目覺されぬ、驚ろきて飛上りさま妾は確と戸口を守り、氣味悪くもその靜まるを待てり』と筆を起して、そは盜賊の侵入し來りたるなりしと語り、幸ひに賊の無事に捕へられたる事を叙して最後に『事終りたる後眠げなる給仕は、餘計の事に騒がせられたりといへる顔にて妾に向ひ、かゝる事は度々ありて珍らしき事にあらずとて、格別驚ろかされたる様子も無りきこれぞ則ち西比利亞におけるホテルの生活にぞある』と結び。

ヘンリー、ノルマン氏のイルクツク記事はまた曰く『余の到着せし前夜寺院は掠奪され、重なる寶玉店は襲はれ……余が牢獄を訪ひたる際、何ものにか毆打せられ、遂に正氣を回復せざる一人が大道より拾はれ來り、少時前砂金を運送せるもの襲撃に遭ひ、三人の武裝

第二編 (西比利亞の探險記)

せる護衛者は銃殺せられ砂金は悉く奪はれたり」と。
 これ豈大いに物騒なる都會にあらずや、然れどもその物騒なるは、
 獨り西比利亞文明の代表者たるこの都會のみに止まらざるなり、
 余が始め烏拉地俄斯德に上陸せんとするや、船長は余に戒しめて曰
 く、君もし生命を貴重なりとせば、夜八時以後において獨り市街を
 通行する事勿れと、余曰く烏拉地俄斯德の巡查は何をなしつゝある
 か、船長曰く、盜賊のために買収せられざる一人の巡查もなし、巡
 査は寧ろ人民の保護よりも、盜賊の保護に任ずと、余はその言の奇
 矯に失せるを思ふて、甚しく之に重きを置く事を躊躇したるなりさ
 られども事實は全く然り、烏拉地俄斯德においてもまた他の都市に
 おけるが如く、生命の安全を保護する所以の途は殆んど缺如せるな
 り、こゝにおいて善良なる市民は各自に生命の安全を護るの道を講

ぜざるべからず、この故に自ら重んずるの紳士は深夜において決し
 て他出せず、殊に土地不案内の新來者の如き、最も深き注意を要す
 る所以なり、この故にまた如何なる商店も夜間必ず夜警または不寢
 番を置かざるはなく、家宅の構内には、猛烈なる露西亞産の番犬を
 放ち置かざるものなし。
 市民はまた早くより戸を鎖し、もし遅く訪問の客ある時は、その親
 友たると誰たるとを問はず、先拳銃を袖に隠さずんば出ず、訪ふも
 の、袖の下にもまた拳銃あり、その放つと放たざると間一髪のみ、
 然れども烏拉地俄斯德にあつては、寧ろその禮讓に富るを認む、若
 夫コルサコフに赴むか、日没後に至れば、一個のマツチを買は
 んとするも、まづその顔に拳銃を向けらるゝ事を覺悟せざるべから
 ず、然り、露骨に拳銃を人の顔に差向くる事はコルサコフにおける

普通の禮式なり、露國政府の尊敬すべき殖民政策は、實に斯の如き文明の賜を西比利亞に移植せり。

(五)

余が烏拉地俄斯德に來れる數日前、此地の豪商アルベルス商店へ地下より隧道を穿ち、アワヤ忍び入らんとする間に發覺して捕縛されたる四人組の盜賊ありき、また最近においてペールヴァヤレーチカ川日本人は一番川と呼ぶに沿へる烏蘇里線路に、胴より切離されたる支那人の頭腦を發見したる椿事ありき、されど此地において支那人朝鮮人の勞働者が殺害さるゝ事は少しも珍らしからず、そは彼等皆その所得の金を身につけ居るが故に、之を殺せば必らず幾千の金を獲ざる事なきによる、而も彼等の殺害せらるゝや、犬猫の道路に殺され居るを見るほどにも、警察官及び露國民の注意を惹かず、

否彼等の同胞すらも敢て關せざるもの、如く、捨て顧みざるなり。夜においては烏拉地俄斯德の馬車もまた須からく警戒を要す、馭者は往々強盜と共謀し、客を拉して寂寞の地に運び去る事あり、かくる場合に客は如何に車上より絶叫するとも、夜九時以後において全く通行を絶ち、家々悉く窓を鎖せる烏拉地俄斯德の街は何等の反響をも與ふる事なかるべし、かくの如き際に馭者をして従順ならしむる唯一の手段は、たゞ拳銃を彼が眉間に差向るの一あるのみ。

烏拉地俄斯德において夜間恐るべきものは、辻強盜と人斬との外別に巡查あり、人通り稀なる所においては、行人時々巡查のために脅迫されて金銭を食ぼらるゝを免れず、故に露人と雖も夜間は巡查を恐れ、日本人の如き巡查の姿を見れば相戒しめて道を他に避くるを賢しとなす、かくの如くにして西比利亞に住せるものは盜賊の災と

共に、實に又警察官の災を享つゝあるなり。

ブラゴエチエンスクに富豪チウリン商店あり、一夜一隊の剽盜馬車を驅つて襲ひ來り、掠奪せる財貨を復馬車に満載し去る、チウリン大いに賞を懸て賊を求む、官亦之を物色すれども得ず、何ぞ知らんこれ當夜警察當直の警部と巡査とが共謀して強盜を働らきたるものならんとは！前に記せる烏拉地俄斯德のアルベルス商店へ、一夜また盜賊の忍び入りたる事あり、之を捕ふれば思ひも寄らぬ入獄中の罪囚なりしより、怪しみてその所以を訊問せしに、毎夜若干の金を常番巡査に與へ、その許可を得て仕事に出かけつゝありたるものなりと答へたりといふ。

元來露國人の盜心に富む事、猶支那人及朝鮮人の如し、その盜むや必らずしも之を罪惡と感ぜず、咎められたる時は、返せば濟むもの

として極めて平氣なり、こは獨り下流社會のものゝみならず、最も規律の嚴肅なるべき陸海軍兵の如きも盛んにまた盜をなす、世界各地の開港場における賣込商人のいふ所によると、露國の軍艦内ほど品物の盜み去らるゝ所なしといふ、余の乗れる交通丸が烏拉地俄斯德に到着せるの時、十名許りの露國税關吏檢閲のために來るや、船中のボーイは一二等の客に警戒を與へて曰く「税關の役人が調べに來ましたから、物を盜まれないやうに用心をなすつて下さい」と、これ實に人を一驚せしむるに足る、開港場多しと雖も税關吏の警戒を要するが如き、恐らくその類を求むる事難かるべし。

されば一面より云ふ時は、西比利亞は上下を通じて盜賊の横行せる活舞臺なり、而も之をして妖雲暗燭たらしむるに最も與つて力ありたるは、重罪囚を野に放ちてその拓殖を企だてたるにあり、然れど

も最近年に至るまで殺人者を西比利亞に横行せしむる事が、人道と文明との上に効ありや否やを決するに躊躇し居たる露國政府も、幸にして漸くその重罪囚を薩哈連に放つの策を取るに至りたるは、たしかに殖民政策上の一進歩にして、實に西伯利亞の暗黒面における一道の曙光たらずんばならず、かくの如くにして他日西比利亞の文明が一回轉をなすを得ばそれ實に露國の幸なり。

(四) 淫猥なる西比利亞

(上)

露西亞は淫風の盛に行はるゝ國なり、露西亞の社會を一層墮落せしめたる西比利亞の社會が、淫猥の空氣に満る知るべきのみ。
『露西亞論』(黒龍會出版)中、露國における破倫の弊風を列擧したるも

のあり、曰く

(一) 今帝の近親にしてモスクワの大公主なる某貴女は街上を巡啓するに方り、偶々美男を發見する時は、憲兵に命じて之を取圍ましめ、直ちに之を宮中に延き、或は一週の日子その寢殿を去らしめず、淫慾盡きたる後賜を厚ふして之を返す事猶往年の女豪エカチエリーナに似たるものあり。

(二) 露の都市には首府ペテルブルグを始め、到る處姦通紹介所の如きものあり、何人と雖も五十留の金子を出してこの俱樂部に入會する時は、如何なる貴女にも自在に面會するを得べし、これ實に全國を淫化せしむる源泉にしてその流毒恐るべきものあり。

(三) 露人は人のためにその妻を犯されつゝ之を知りて平然その對手と交際する風あり。

(四) 妻女他人と姦通して相共に他に出奔するも寡居の夫は名譽上離婚の訴を提起し得ず、社會もまた決して姦婦姦夫に制裁を加ふる事なし。

(五) 他人と公然その妻女を交換し居るものあり、社會は決して之を怪まず、上流社會にもその例多し。

(六) 人の妻にして本夫の胤ならざる他人の胤を宿すもの多し。

(七) 人の妻にして賣淫する如きは驚ろくに足らず、旅行中他人と同寝する如きことも尋常茶飯なり。

(八) 奸夫本夫の間に往々決闘の行はるゝ事あり、蓋し地位あるものに限る、而して奸夫本夫を斃しその妻を奪ふも天下之を怪しむものなし。

蓋しこれ露國における社會の病根を最も痛切に指摘したるものなり

思ふに露國をして斯の如く淫風に富ましむるもの、一にその半年に亘れる冬と、この長さ冬のために餘儀なくさるゝ家居の不健全による、露國の冬は清淨なる天然の中にありて、活潑なる勞働をなす事を禁止し、不完全なる屋内に蟄居して遊惰逸樂に耽るの習慣を形作らしむ、淫風を助成せざらんとするも得んや。

露西亞の家屋はその本國にあると、西比利亞にあるとを問はず、冬季は酷烈の寒氣を防ぐために、二重になせる窓を密閉し、毫も戶外の空氣を侵入せしめず、而してその室内には盛に暖爐を焚きて、熱帯の植物を培養するに足るの熱度を作り、會て代謝せざるの空氣を呼吸してますますその神經を刺激し、情慾を旺ならしむ、此間に處するの男女翩翩たる輕衣を纏ひ、或は衣を徹して裸體となり、飲酒し、舞蹈し、密會し、あらゆる不良の娛樂に耽りて只その足らざる

を恐る、夜は即ち夫妻兄妹男女廣き暖爐ペーチカの上に雜寢し、淫
猥云ふに忍びざる獸行をなすの機會を與へらる、もし夫上流の徒に
至つては舞踏會あり、假裝會あり、音樂會あり、骨牌會あり、紳士
淑女、既婚者未婚者、老者少者、互に手を取りて相抱擁し、相歡語
し、娛樂漸やく盡きて三々五々その密會の場處に急ぐ、男女間の禮
節破れ、夫妻間の貞操汚され、家庭の神聖は全く滅却し了してまた
求むべくもあらず、斯の如くにして全露の社會は、滔々としてその
冬季における室内の空氣の如くに、最も汚濁し、最も腐敗せるもの
とはなれるなり。

(中)

露西亞の冬は墮落の冬なり、密會の冬なり、男女赤裸々の冬なり、
酷寒水銀を凍らしむるの外氣はこゝに男女間の障屏を撤去して、盛

んに情熱の火を燃えしむ、異性羞耻の念全く滅殺され、男女互に醜
態を曝露して恥ぢず、露國は實に斯くの如くにして、到る處風俗壞
亂の光景に缺くるなし。
男女混浴の露西亞風呂もまた露西亞の社會における適切の産物なり
情慾の最も旺盛なる露人、男女赤裸々となりて一堂に會浴す、一幅
風俗壞亂の活畫にあらずして何ぞ、露西亞風呂に數種あり、所謂一
等と稱するものに至つては浴室の外、化粧室あり、寢臺あり、鍵あ
り、浴料を拂ひたるもの即ち浴室の主人にして、敢て他の侵入を許
さず、何人と雖ども自由に相思の婦、または人の妻を携へ行くべく
はた何人を問はず、別に二十留を投ぜば、一朶の花を擁して、化粧
室裏の人となるを得べし。
獨り浴室において赤裸々の露人を見るのみならず、旅行者若夏日を

第二編 (露國を西比利亞)

期して、ドン及びボルカ附近の町村に赴むかば、往々妙齡の處女既婚の少婦が、一片の布をも纏はず、雪の如き全身を露出して、宛がら「美人魚」の如く河畔に狂ひ遊ぶを見る事あるべしと云ふ。露國は最もその私生兒に富むを以て有名なり、千八百九十七年の統計によると、歐露に於る私生兒の數實に十二萬八千六百六十一人。婦徳なるものは殆んど露人に解せられざるなり、露西亞の諺に曰く「女には精神なく只蒸發氣あるのみ」又曰く「七人の女を合せて只一個の靈魂を有す」と、然り、露西亞の女はその輕浮なる事蒸發氣の如し、適切に日本の俗語をもて評すれば、所謂風船玉の如き女なり姦通と密通とは最も容易に行はる、或極端の觀察者は、露西亞の如何なる處女も、汚されざるものなく、如何なる妻も、犯されざるものなしと語る、これは思ふにあまりに極端ならん、然れどもまた實に

一面の事實たらずんばあらず。殊に風俗の一層墮落し、女子の最も珍重され、歡迎さるゝ西比利亞の地にあつて、婦徳の頹廢せる事は全く言語に絶す、上流の紳士にして往々その妻女の交換を行ふが如き珍らしとするに足らず、また官吏軍人の若き妻にして上長官に弄ばれざるもの殆んど鮮し、西比利亞における中流の官吏、また中少尉等の軍人にありては、物價の甚だ廉ならざる、只その收入のみにては、善く妻子を養ひ、善く女性に依てその懐を温かならしめつゝある技師、上長官の輩、他の弱點を利用して、公然人の妻を犯し、或は劇場に誘なひ或は露西亞風呂に伴ひ、時にまたチウリン、アルベルス等の商店に入りて、寶玉を買與へ、また衣服を買與ふ、もしそれ秋天高く氣澄るの候、西比利

亞の各都市における公園を瞥見せんか、かくの如き妻女が身分不相
應の華美を競ひ、翩々として艶冶の態をなし、わが夫ならぬ仇し男
に伴はれて相擁し、接吻し、呼やき、休息し、逍遙せる蕩心の光景
を見ざる事なしといふ、而も婦人の秘密を護るに忠實なる社會は、
その姦通を認めて何等の制裁を與へず、その夫もまた之を知りて見
て見ぬ振をなせるなり。

(下)

一面より云へば露國は賣淫國なり、西比利亞は賣淫の天地なり、如
何なる農民の妻も、露國男女の最も嗜める一瓶のオホツカ酒を、そ
の夫に與ふる事によつて、辱かしめ得ざるものなく、姦し得ざるも
のなし、否オホツカの一瓶を得んがためには、その夫は戶外に避け
て、喜んで姦通の見張番をすらすべし、妻もまた夫と共に一杯の

オホツカを傾けんがためには、その節操を賣る事を、甚だ賢き道
と考ふるなり。

蓋し露國にあつて姦通の斯の如く容易なるもの、宗教の腐敗もまた
與つて力なしとせず、希臘教の制、結婚の時新郎新婦が、神前に誓
約をなすに方りてや、必らず相當の金錢を教務院に喜捨せざるべか
らず、これ實に教務院における重なる財源の一たり、而して神前に
誓ふ事なくして、處女と通ずる時は、國教を蹂躪するものとして、
重き法律上の罪に問はる、たゞそれ有夫の婦の姦通に至つては則ち
問ふ處なし、風教の源泉にして亂るゝ事斯の如し、露人が姦通を以
て甚しき罪惡と感ぜざるに至る、誠に偶然にあらずといふべし。
この故に露人の妻にして、本夫の胤を宿さざるもの極めて多し、或
は曰く露人の兄弟にして、その容貌の相似たるもの稀なりと、言奇

矯に失せるあらんも、また此間の消息を道破して餘蘊なきもの、然れども最も奇なるは、妻の産るもの、必らずしも、自己の胤ならざるを知つて、猶且我兒として、之を愛育するの點にあり、これ實に大陸的氣風か、抑もまた露西亞人の大なる所以か。

人心の根底亂るゝ事斯の如し、斯の如くにして猶その災を享ずとせば、これ上帝の審判なきなり、果然風俗頹廢の結果として、今日盛んに西比利亞の都市村落を茶毒しつゝあるものあり、何んぞや、劇性なる微毒の蔓延これなり、殊に醫術幼稚にして毫も進歩せず、醫師の最も缺乏せる西比利亞の地にあつては、その病毒傳播の猛烈なる、實に恐るべきものあり、甚しきは往々全村を擧て、微毒患者となれるあり、今日にては既に一種の遺傳病を形成し、滔々として厓弱魯鈍の子孫を繁殖せしむるの勢をなせりといふ、嘗て露國の醫師

キシンは、レナ河岸の村落において、癩癧患者を調査せしに、その傳染の甚しき、人より人に傳ふるにあらざして、村より村に傳はるの狀あり、而してその原因は婦女が疾病を隠蔽せると、撲滅の方法なきがため、結婚によりてますますその病毒を蔓延せしむるにありとなせり。

露國の社會は實に斯くまでに腐敗の極に達せり、然れども淫猥なる社會は、實にまた斯の如くにして、上帝の審判を受つゝあるを見ずや、希はくはソドム、ゴモラを焚るの火をして、更に西比利亞の野を一炬に付せしめよ。

(五) 西比利亞に於る文明の價值

(一)

西ベリアにおける文明は、また之を構成せる露人の特質を表はして、總てこれ極端と極端との集合なり、矛盾なり、衝突なり、倫敦巴里に比して遜色なき文明あれば、支那朝鮮にも見るべからざる野蠻あり、野蠻と文明と猛烈なる衝突をなしつゝ、その調和を見出さざるは西ベリアにおける文明の現状にあらずや、西ベリアは實に文明と野蠻と、油と水との如く相反しつゝある、一個形容すべからざる混沌の社會をなせり、故に西ベリアの文明を説んとするものは必ずやこの相矛盾せる兩半面の觀察を遂ざるべからず。

乞ふ文明の一面を見ん。

西ベリアにおいて最も完備せる文明の利器はその鐵道を推さざるべからず、西ベリアには莫斯科よりせるものと、東方烏拉地俄斯德よりせる烏蘇里線との、未だ相連絡せざる二線路あり、烏蘇里線また

可ならざるにあらずと雖も、最も完備せるものは、今日西ベリア鐵道と稱する莫斯科、イルクツク間三千餘露里七百餘里の大線路なり、この線路に使用せる列車は世界における最も贅澤なるものの一にして、露本國においても斯の如き贅澤なるものを有せざるのみか、他の歐洲大陸米國においてもまた殆ど比倫を見ざる所、化粧室、浴室、圖書室、音楽室等の設備悉く備はらざるなく、一たび客室内の鈕を押す時は、いつにても給仕はその命を聞くべく來り、汽車中において恰かも完全なるホテルにあるが如くならしめ、旅客をして最も愉快に、最も幸福に旅行を遂げしむるもの、西ベリア鐵道の右に出るものなかるべしとすら評せらる、斯の如きは實に利益の打算、收支の勘定等を基礎とせる、他の私設會社等にあつて、到底企だつ可からざる處にして、只神聖犯すべからずと稱せらるゝツァールの命令

の下に、始めて建設せらるべきものなるのみ、あゝかくの如き鐵道あり、西比利亞の文明はまた以て大いに誇るべきにあらずや。余をして三たびヘンリー、ノルマン氏の記事を引用する事を許せ、そのイルクツクの商店を記するものに曰く「こゝには倫敦目貫の場所たる西部にもあるまじき贅澤の店少なからず、寫真器械店の如き歐洲の市街を渉るとも、かくまで完備せるはあるまじと信ぜらるゝまでに、また何人が西比利亞にありてかゝるものを用ゆるかと思はるゝほどに最新式の器械幾種類をも藏し居るを見受け、また世界の何處にもあるまじき完全の銃砲店をも見受けたり、實に倫敦に求むべからざるもの、來りて之を西比利亞の地に求むるを得べし」と、獨りイルクツクのみならず、烏拉地俄斯德、ハッロフカ、ブラゴエチエンスク等各都市に、その商店を有せるチウリン、アルベルス等

に至つては、三層四層の大厦に、處狭きまで商品を陳列し、日用の必需品より、衣服贅澤品美術品等に至るまで、悉く備はらざるなく倫敦若くは巴里における交際社會の紳士貴婦人の要すべき、あらゆる奢侈品は、こゝに來りて求め得ざるものなしと稱せらる、あゝ到る處にかくの如く商店あり、西比利亞の文明はまた以て大いに誇るべきにあらずや。一たび日本各開港場の矮屋を見馴れたるものが、始めて烏拉地俄斯德の埠頭に立んか、悉く石造若くは煉瓦より成れる大厦高樓の層々鱗次せるを見、誰かその壯大雄偉の光景に一驚を喫せざるものあらん、加ふるに港灣の設備完全にして遺憾なきが如き、日本に見るべからざる處とす、あゝ東方の鎮守としてかくの如き都市を有す、西比利亞の文明はまた以て大いに誇るべきにあらずや。

(二)

西ベリアは實に斯の如く、その一面においては、泰西諸國に比して恥るなきの文明を有す、然れどもその半面においては、また實に驚ろくべきの野蠻を併せ有す。

警察はあれども無きに優りて、危険なる慘劇の演ぜらるゝ事彼が如くなる、道路は平日において黄塵太陽の面を掠め、雨天において泥濘を没し、時に小兒を溺れしむるの甚しきに至るも、修繕改造の法を講ぜざる事彼が如くなる、これ既に文明の體面を維持する所以にあらず、而も西ベリアの非文明を表示して、更に遺憾なきもの、猶二三にして止まらざるなり、乞ふ數例を擧げしめよ。

(一) 露國內には元來醫師最も缺乏し、その本國と雖も都會の地を除いては、極めて廣漠たる三四個村に、只一人の醫師を有するの割合

に止まるが故に、素より急病人の間に合はず、只自然療法に委するの有り様にして、ために人命を縮むる事少なからず、露人の短命なるは、種々の原因あるべしと雖ども、醫師の不足なる事は、確かにその重なる原因の一なるべしと稱せらる、本國において既に斯の如し西ベリアにおける状態に至つては、則ち知るべきのみ、西ベリアの地に於ては醫師の極めて不足なるのみか、殆ど完全の醫師を求むべくもあらず、醫師既に然り、産婆の如きに至つては、露國一億三千万の人口中、僅に八九千人を有するに過ぎるが故に、西ベリアにおける産婆の有無を問ふが如きは、寧ろ野暮の沙汰たるを免れず、露國にあつては、子の産るゝ時、多くはたゞ多少の經驗あるものを依頼し來りて、取上を托するに止まる、烏拉地俄斯徳の如き、また從來一人の産婆を有せざりしに、先年在留日本人等の膨脹に連れ、産

婆の必要を感じて、之を日本より招聘したるに、露西亞人とても流石に産婆の調法なる事を知れるが故、争うて之を聘するに至り、ために非常の繁昌を來し、今日にては同地の産婆は只日本人に限れるのみなりといふが如き、蓋しこれ滿洲朝鮮にも無き圖なるべし。
(二) 余が烏拉地俄斯德に上陸したるの日、始めて同地に二三人の虎列拉患者を生じたりき、而して猶續々滿洲ハルピンを通じて、烏港に蔓延し來るの恐あるより、同地の官吏は大に狼狽し、兎も角大消毒に着手する事となれり、然るに驚ろくべし、その消毒に要すべき薬剤に至つては、西比利亞の地之を求むるの處なく、止むを得ずして之を日本に注文するの必要に迫れり、かくて虎列拉は容赦なく侵入し來るにも拘はらず、大消毒は二週間の日子を、延期せざるべからざるの止むを得ざるに至れるなりき、斯の如き有様なるが故に、

烏港に始めて虎列拉を發生してより、三週間を経ざるに、非常に猛烈の勢を以て蔓延し來り、遂に數百人の患者を生じ、ために非常なる大恐慌を來さしむるに至りたる事當時新聞紙の傳へたる所の如し元來西比利亞の如き、虎列拉の蔓延に適せざるの地にあつて、斯の如く劇烈の傳播を招けるもの、一に消毒の不備に依ずんばならず、歐米の紳士貴婦人を満足せしめ得べき奢侈店は則ちありて、消毒薬を求むべき完全の藥舖は則ち無し、天下豈斯の如き不健全の文明あらんや。斯の如き不具の文明あらんや。

(三)

(三) 人は支那人及び朝鮮人の不潔を説く、然れども露西亞人の不潔に至つては、甚しく朝鮮人支那人と異なる所なし、露人は元來不潔を意とせざる人種なり、更に露國の長さ冬は、彼等をしてますます

不潔を意とするの念を鈍からしむ、家居の彼等はその二重窓を密閉する事によりて、空気を汚濁ならしめ、塵埃を堆積せしめ、熱帯の花を開かしむべき室内の熱度は、これ等の不潔物を醗酵せしめて、南京虫を生じ虱を生じ、蛋を生ずるに至るも男女平然としてペーチカの上に横臥の夢を食ぼるの状、温突の上に眠れる朝鮮人と幾千の徑庭がある、加ふるに憐れむべき露國の農民はその輕き財囊を以て重き衣服を襲ねざるべからざるが故に、素より着換を有せざるもの多く、長き冬の間、一枚の襯衣をすら換へざるものあり、汚臭紛々たる敝衣を着して意とせざるもの、下等支那人とまた五十歩百歩にあらずや。殊に不潔なるは露西亞の厠なり、厠の完全なるものを有するは、只僅かに上流の家屋のみ、その他に至つては大抵地を穿てるまゝの處

へ、僅かに雨雪を凌ぐの屋敷を構らふるに過ぎず、さればその不潔なる、不便なる、素より言語に絶し、潔癖なる日本人のよく堪へ得る處にあらず、余は烏港及びニコリスクに於て、日本人の家屋に附屬せる便所の極めて不潔なると、その設備の極めて不完全なるとに驚ろきたるが、後日本人なればこそまだしもかゝる便所を有せるものにして、露人の厠に至つては更に甚しき不躰裁を極め、朝鮮人の厠と全く撰ぶ事なきを知り得たり、且彼等は厠に入るに紙を用わず枯草木片等を用ゐ、甚しきは手を用ゐて意とせず、故に露人は往々日本人が厠に上れる後手を洗ふを見て、日本人もまた之を爲すかと語りて、一笑する事ありといふ。若夫春暖融和の候に至らんか、冬季窓外に放棄せられ、雪中に堆積せるの汚物、糞尿の類、一時に融解し、腐敗し、蒸發し、滿地混濁

の泥濘となり、靴に着けられて室内に運び入れらる、旅行者は曰く露西亞の雪解は世界隨一の不潔なりと、あゝ斯の如き不潔を意とせざるスラブ民族は、未開人民の絶好標本にあらざるなきか。

(四) 烏拉地俄斯徳の如き、東方鎮守の大都市として其外觀は實に彼が如く壯大なり、然れども上水道を有せず、下水道を有せず、電燈を有せず、電話を有せず、只その有せるものは有名なる悪道路のみ元來烏港の地たる最も飲料水に缺乏し、市有の井僅かに數十個所あるに過ぎず、而も秋冬無雨の際に至れば、井水涸れて黄濁し、市民常に大なる恐慌を起す、此地の理髮業者の如き、井水の乏しきがために、顔及び頭髮を洗滌する事なく、只酒精を濕ほせる布をもて拭ふに過ぎざるのみ、飲料水の斯くまでに缺乏を告ぐるに拘はらず且つその水質の甚しく不良なるに拘はらず、烏港の官民は嘗て上水

道の計畫をなせるを聞かざるなり。

電話なく、電燈なきが如き、また何等の不便ぞ、わが釜山居留地の如き、僅かに八九千の人口を有するに止まるも猶且電燈あり、電話あり、水道あり、畧文明の設備に缺くる處あるなし、歐亞交通の關門たる烏港にして、その非文明を表示せる斯の如き豈また驚ろくべきにあらずや。

(四)

(五) 郵便事務の緩慢不整頓も亦西北利亞の特色なり、烏拉地俄斯徳の如き、露國東方の關門なるが故に、西北利亞にあつては比較的郵便事務の進歩せる土地なるは云ふまでもなし、然れども烏港における郵便取扱の狀態は如何。

郵便物を搭載せる船舶の開港場に入來るや、船にて旅客よりも貨物

よりも、真先に陸揚せしむるものは郵便物なり、また陸上より船舶の入港を見かけて、真先に來るものは、郵便物を受取るべき官吏なり、然れども獨り烏港にあつては然らず、乞ふわが交通丸の例を引かしめよ、余等の烏港に入りたるは當日の午後二時二十五分なりしが、檢疫吏の検査を了り、税關吏の臨檢を了るまでに、凡そ四時間を要し、此間旅客の大半は漸次また上陸し、やがて税關吏すら悉く引上んとする六時前に至りて、漸やく郵便船は來りたるなりき、而して斯の如き事は往々珍らしからずといふ。

陸上における郵便物集配の緩慢不規律は、また以て之を推すに難からず、殊に最も驚ろくべきは、一ヶ月少くも四五日以上を有せる宗教上の祭日には、郵便事務を休止し、全く郵便物を集配せざる事なり、更に烏港における幾萬の露人、及び在留人の不便に同情を

表せざる能はざるは、斯の如き大都市に、一個の郵便函を有せず、一個の切手賣下所を有せざる事なり、烏港の如何なる隅に居住する人も、郵便切手を購ひ、且郵便物を投ぜんがためには、必らずやスヴェトウランスカヤ街なる唯一の郵便局に赴むかざるべからず、豈又驚ろくべきにあらずや、斯の如き不便を居住民に與ふるの外、露國の郵便局は、なほ一の野蠻を有す、そは切手を購へるものに對し代價の餘剩あるも、決して釣錢を支拂はず、之を沒收して官吏の收入とせる一事なり。

余は烏港にありたるの日、一日かねて同地に滞在在中なりし遞信書記官下村君、及わが交通丸郵便事務員交通丸及凱旋丸には、遞信省の事業として、船内に郵便局を開始しつゝあるなり、尊敬すべき我友邦に比して如何なる徑庭なるよ！熊澤君等と共に、壯大なる烏港の

郵便局を訪問せし事ありき、當時局長は最も鄭重に余等を延き、且自ら先導して各室を縦覧せしめ、頻りにその整頓を誇れるもの、如く、殊に電信室に導びける際の如きは、その使用するタイプライタ等を余等のために運轉せしめ、顧みて日本の郵便事務如何との問を發せる、恰かも日本には未だ斯の如く完全なるなからんといふに似たるものありき。先生何ぞ知らん、わが大坂高麗橋郵便支局の事務すら、なほ遙かにこの壯大なる大建築物内の事務よりも、敏捷なるものあるべきを。

元來露國人が郵便事務に對する思想の幼稚なるは爲換制度の殆んど露人に信用されず、多く皆現金托送に依れるの一事を以ても知るべし、今日露國における現金輸送の額は、實に爲換の三十三倍を占るといふ、余等が烏港の郵便局を訪ひたるの際も、かくの如き現金を

容れたる大革袋の累々たるに驚ろきたり、從來露國の郵便物が往々奪掠の災ひに遭ひ、時にまた郵便物搭載の列車が賊徒のために襲撃さるゝの椿事を生ずる事ある、また決して偶然にあらざるを知るべし。

西ベリアにおける非文明は上來列舉せる所に止まらず、或は官吏が賄賂を以て第二の俸給となせるため、賄賂あれば以て盗むべく、姦通すべく、殺すべく、關税を免るべく、法網を潜るべく、以てあらゆる不法を押し得ざる事なきが如き、或は裁判法の極めて不完全にして、只裁判官の任意に裁定するが如き、或は税關檢閲の際多くの場合において、旅客の携ふる書籍新聞雜誌の類を悉く引上げ、日本支那の書冊は之を東洋語學校に托して檢閲せしめ、はた沒收せしめ、英字を以て記されたるものは、別に之を彼得堡に送るが故に、

第二編 西比里亞の文明の發見(4)

幸ひにして再び旅客の手に戻る事あるも、少なくとも半年の日子を經過して、最も氣長き旅客も最早西比利亞の地を立去れる後なるが如き、或は夏季午後一時より三時前後にかけては、裁判警察その他諸官衙の官吏、何れも午睡の夢を食ぼり、何事ありても一切受付けざるが如き、すべて支那朝鮮と何等の徑庭あるを見ず、所謂露國の文明なるものは、極めて不具不健全の文明にして、秩序あり進歩ある西歐の文明と素より同日の談にあらざるを知るべし。

(六) 露人雜觀

(上)

露人がその個人性に多くの矛盾を有せるが如くに、露國の官衙もまたその仕事の上に多くの矛盾を有す、假へばわが交通丸の烏港に入

れる時の如き、まさに虎列拉流行の初期なりしより、嚴重に船舶の檢疫を行ひつゝあり、爲めに旅客はみな貴重の時間を檢疫のために徒消せしめられたるの事實あるに拘はらず、虎列拉の本據地たりし滿洲ハルピンを通過し來れる烏蘇里鐵道の烏港停車場においては嘗て何等の檢疫をもなさざるなり、而して事實は續々として烏蘇里線により、虎病のバチルス輸入されつゝあり、現に余がニコリスクより歸り來れる時の如き、同列車中に二名の死亡虎列拉患者を發見したるの戦慄すべき事實さへありたるなり、而も烏港にて下車せる旅客は、何等の拘束を受る事なし、露國官吏の矛盾は殆んど常識を以て判断し難きものなり。

烏港においては密輸入を防ぐの目的を以て、入港の船舶に對しては船長室のシートまで取去りて搜索するが如き、無法の臨檢を行ひ、

陸揚せざる貨物には、嚴重なる封印を下し、無論旅客に對しては一枚のハンケチをも免さじと、その携帶せる鞆行李の隅より隅まで亂脈に掻き捜し見るの蠻行を敢てし、船舶の碇船中は二名以上の税關吏を晝夜船内に留め、看視せしめつゝあるに拘はらず、滿州鐵道によりて入り來るもの、乃至朝鮮より豆滿江を越え馬背によりて運ばれ來る密輸入品に對しては、官吏は知らざるものゝ如くし、敢て之に干渉せざるなり、斯の如き矛盾は露國の官人にして始めて敢てすべきもの、烏港在留の邦人の如き、これを露人の仕事の特質なりとて敢て怪しまざる者の如し、矛盾は實に露國官人の專賣特許たり。余の烏港に上陸せんとするや、一個の行李を船中に殘し、一個の鞆を陸上に携へ行んとす、肥滿長大象の如き露國税關の長官、豚の如き聲を出して大喝して曰く、船はホテルにあらず、荷物を携へ行か

んとせば悉く携へ行け、一個を殘し、一個を携へ行くが如きは斷じて許さずと、余は船員を通じてその無意味なるを詰り、鞆を携へ行くべきを主張したるに、彼の肥大なる顔は眞赤となり、上下左右鬚髯だらけの口は忽ち沫を飛ばして、余の命令は冒すべからず、この二個の荷物を船室に運び返せと配下の官吏に命じ直に封印をなして船の出港するまで手を觸るゝ事能はざらしめんと叫べり、余その亂暴に驚ろき、また口を嚙みて云はず、然るに何ぞ料らん、先生余の船室に來り、二個の荷物を檢めしめたるも、その多くの場合においてなすが如く封印を施す事なくして立去りたるが故に、余は後自在に余の荷物を船外に取出すを得たるなりき、またこれ何等の矛盾、何等の滑稽。

(中)

すべての都市が悉く武装せる西比利亞の地は最も他國人——殊に日本人の來りて撮影するを忌み、軍事に關せざる諸官衙に至るまで斷じてその撮影を許さず、烏港の大通りスヴェトウランスカヤ街に壯大なる郵便電信局の建物あり、わが小野田セメント會社のセメントを用ゐ、營造せるものに係る、故に同會社にては紀念のためを撮影せんと欲し百方その筋に手を廻はして懇願する處ありしも許されず、即ち公々然、官吏も通行し、軍人も通行し、車馬絡繹として、交通の最も頻繁を極むるスヴェトウランスカヤ街の真中に、寫眞器械を据つけ、日本人自から之を撮影するの大膽に出たるに、通行せる官吏見て怪しまず、軍人怪しまず、憲兵怪しまず、巡查怪しまず、郵便局の吏員また怪しまず、最も完全に遺憾なく郵便電信局の全部を撮影するを得たりといふ、こゝに至つては人をしてその矛盾に驚

ろくよりも、寧ろその無頓着に驚ろかしむ。武装せる各都市の寫眞は之を撮影するを許さざれば、また素よりその販賣を許すべき道理なし、然るに余のニコリスクに赴むける時、日本人の營業せる同地屈指の寫眞店田川方の店頭に、その嚴然たる兵營をも併せて、ニコリスクの全市を撮影せる、大版三枚續きの寫眞を掲げて販賣し居るを見る、余その臺紙に帖付せざるものを買取り、紙に巻きてポケットに收めまさに店頭を出んとするや、店員忽ち余に注意して曰く、その寫眞は極めて露人に秘せざるべからず、内ポケットに收め玉はずば、奇禍を買ふ事あらんと、余呆然として辭の出る處を知らず、却つて思ふ天下豈これより矛盾の事あらんや而も西比利亞に在住せるものは、見て以て尋常普通の事となせるなり、露國に於る普通の事は、到底常識を以て解すべからざるなり。

日本の軍事探偵が西比利亞に入込み居るべき事は露國の官人が最も痛心せる處なり、この故に日本人の、故なくして拘禁されるもの極めて多し、或は一枚の地圖を持つが故に拘禁される事あり、或は兵營の附近を徘徊したりといふの故を以て拘禁される事あり、余のニコリスクに赴むかんとする時、烏蘇里鐵道の客車内にありて、手帳に一二記す處あるや、歐露を経て御歸朝あらせらるゝ小松宮殿下をハルピンに奉送せんため、余と車室を同じうしたる烏港日本貿易事務館の鈴木君、忽ち余の手を捕て曰く、露人の前にては斷じて手帳を出す事勿れ、殊に烏蘇里鐵道の役員は、悉く軍人なるを忘るべからずと、西比利亞にあつて日本人の警戒を加へざるべからざる實に斯の如し、思ふにこれ等の事を聞ける日本人は、露人のわが邦人に對する常に一種の猜疑心を以てし、一刻もわれに心を許すが如き事

なからんとの想像を下すならん、然れども日本人の想像を以て解すべからざるは露人なり、余が遞信書記官下村君等と郵便局を訪ふて歸れる途すがら、下村君余に語つて曰く、余は露人の腹藏なきに驚ろき入れり、余の囊に局長を問ふて、或郵便事務について少しく調査する處あらんとせしや、その調査せし記録は、局長が自筆のもの一枚を金庫に藏しありたるのみ、そは極めて重要なものなりしにも拘はらず、局長自ら金庫より取出して、余に之を携へ歸るを許せりこれ既に驚ろくべし、余はまた後に一課長を訪問したる事あり、彼は長官を呼來らんとて、彼の私室に只獨り余を殘し行き三十分許りを過ぎ長官を伴ふて入來れり、これまた甚だ驚ろくべきにあらずや露國の郵便事務は多少軍事的性質を帯び、またこれ一個の武裝的郵便局なるに、重要な書類を備へ置ける私室に、只獨り日本人を殘

し置きて敢て意に介せず、彼といひこれといひ、その寛宏の度量儘に日本人を愧死せしむるに足るものあるにあらずやと、露人は遂に常識を以て解すべからざるモンスターなり。

(下)

よし多くの矛盾を有せるにせよ、露人の寛大にして無頓着なる、頗る大陸的鷹揚の氣風を有せるは争ふべからざる事實なり、彼は實に輕快にして無邪氣なる人種なり、親切にしてまた甚だ温かき人種なり、彼は如何なる人に對しても毛嫌ひせず、温かき心をもつて之に接するの風あり、朝鮮人も支那人も皆彼と接するを喜べるのみか、西比利亞における日露人の間柄もまた頗る親睦なり、彼の同化力の大なるまた實に此點にありとなさざるべからず、他の白哲人は自ら高うして、黄色人を卑しむの風あるも、露人に至つては然らず、彼

は先天的に毫も自ら高しとせず、直ちに同胞を以て臨むを常とす、日本人の間に對して最も親切に之に答へ、懇々として知ざるを教へて倦ざるが如きは、他の歐洲人に多く見るべからざる處ならん。露國は希臘教を以て國教となす、ツァールは實に國家の首長にしてまた實に教會の首長たり、國家を挿さんて民に臨む、宗教の勢力大なるや知るべし、希臘教は一に迷信の凝固より成り、最も進化せざる宗教なりと稱せらる、宗教を以て黔首を愚にせんとするは、長く專制政體を維持せざる可らざる露國の政略なり、故に西比利亞の地何れに行くとしても、百戸の邑必らず危然たる大寺院の碧圓蓋金字が、燦爛として日光に映發するを見ざるなし、最も迷信に富める露國の善男善女は、争ふて茲に養し、華を供へ燈を點じ、時に又秘密の懺悔室裏に入て、蓮門教以上の醜聲を放つ。

迷信多きの民はまた多くの祭日を有す、露國民は世界中にありて、祭日を最も多く有せる國民にして、大小の祭日を併せ實に百九日の多きを有せり、而して其大祭日と稱するもの五十日弱、その中には純粹の宗教祭以外、皇帝の戴冠日、即位式日、先帝、現皇帝、皇后皇太后の誕生日、命名日、現皇帝厄難紀念日等を含む、故に露國にあいては一週の中に日曜以外、一日以上の祭日を有せるものにしてこれ等の祭日及日曜日には諸官衙は素より一二等の商店は悉く業を休まざるべからず、郵便の集配すら停止する事既記の如し！若し之を犯すものある時は、課税の厄に遭ふか、若くは營業を停止せらるかくの如くにして露國の祭日が商工業の發達を妨げ、諸官衙における事務の進行を阻害する事また決して少なきにあらざるなり。露國の諸官衙における奇異なる現象は、そのクリスマス以前に

て、下級官吏に金を恵むがために必らず市中の一二等商店に寄附を乞ふの一事なり、烏港の如き、郵便局、税關、露清銀行、市役所、警察署等、皆その寄附を乞に廻るが故に、一二等の商店はその繁雜に堪ず、またその冗費に堪へずといふ、實際において憐れむべき露國の下級官吏は、かくの如き恩恵に浴するにあらざれば、クリスマス用の用意をなす事能はざるなり、獨り露國の官吏にして、有福なるものは、只賄賂によりて生活する上級者あるのみ。露國に來るもの、煩に堪へざるは、その何處に赴むも、その入口には帽子を取り外套を取り、上靴を取るものありて、必らず之れに五乃至十哥の心附を與へざるべからざる事なり、獨り珈琲店料理店等のみならず、諸官衙また然り、而も決して一人に止らず、帽子を取らるものと、外套を取らるものと、上靴を取らるものと、悉く別人なる

事ありて、ために意外の散財を被むらしめらるゝの例官衙において決して珍らしからずといふ、ポケットの空虚なる時は、露國の官衙に尋ね行く事能はず、而も露國の俗見て以て怪しまざるなり。

(七) 烏蘇里鐵道所見

(一)

烏蘇里鐵道は西比利亞大鐵道に聯絡すべき幹線の東方よりするものに異ならず、現今烏港よりハッロフスクに至る七百二十露里(一露里は十町弱)を通じ別にニコリスクよりグロデコフに至る支線九十一露里を通ぜり。

烏蘇里鐵道の起點たる烏港停車場はアレウトスカヤ街の南端にあり、東直ちに商港埠頭に連なりて水陸の便を極む、プラットホーム

の中央に白大理石を以て、一八八八の四大亞刺比亞文字を顯はせるは、先帝アレキサンドル第三世が西比利亞縱貫大鐵道布設を勅裁あらせられたる年紀を録せるなり。

その起工式は千八百九十一年五月、現皇帝ニコラス第二世が未だ皇太子にて渡らせらるゝ時、先帝の勅命に依り我邦御來遊の歸途烏港に行啓あらせられ、親しく擧式あらせられたる者にして、當時の光景の如き、神聖なるツアールの前には只服従あるのみなる專制政治の靈妙を發揮して、壯絶痛絶いたく世人を驚倒せしむるものありしと云ふ、余は烏蘇里鐵道を説くに當つて、十年猶露人の眼に新たなる、當時の光景を記するを逸すべからず。

この世界共通の大道路を開くべく、その起工の式を擧るに當りて、停車場豫定地より一番川に至る四露里間を開鑿し、且之に軌道を敷

設し、當日において是非とも試運轉を行ふべき目的を以てこの難工事に着手したるは、實に式前一週日の短時間にありとす、かくの如きはこれ鬼工にあらざれば、萬能力を有せる露國政府にして始めてなすべきのみ。

この時に際してや、その通路に當る人家尤も石造煉瓦造倉庫等に對しては、その通牒の達せると同時に一二時間の猶豫をだも與へず、讀如字に即刻立退くべきことを命じ、通牒の達すると同時に、無数の工兵をして、その破壊に取かゝらしめたるなり、市民の驚愕の如きこゝに説くを須ゐず、只皇帝の命令とあるに詮方なく、家財を運びて他に轉せんとすれば、早くも屋壁は取壊たれて最早家の中に入るべくもあらず、眞にこれ迅雷を蔽ふに遑なき底の光景なれば、恰かも不意に敵軍の包圍攻撃を受たるに異ならず、老幼婦女の泣叫

ぶもの、屋瓦に打たれて傷くもの、狼狽するもの、立退くもの、叱咤するもの、破壊に従事するもの、紛然雜然として、一幅修羅の活畫を現出し、颯風の天を壓して襲ひ來るが如く、怒濤の地を捲て崩れかゝるが如く、猛烈慘憺たる勢を以て、市民の家屋と云ず、政府の建物と云はず、一齊に破壊し去り、海軍倉庫の如きすら一物を取出すの暇もあらせず、貯藏の物品を併せて悉く破壊し了はり、流石に海軍部よりは大いに苦情を申込たるも、勅命なりとて只一言の下に刻つけられ、黙して止めりと云ふ程なれば、市民の家屋財産が、擧て塵土に附せられたる、また怪しむを要せざるべし、即ち斯の如くにして鐵道線路は開鑿せられ、埋立てられ、軌道を敷れ、極めて困難なる大工事を、僅々七日の日子を以て成功せしめ、以て首尾よくその式日に、機關車を運轉するを得せしめたるなり、あゝ世界の

大雄圖たる西比利亞鐵道の起工式において、世人は實に羅馬のテロ帝を起し來るも、猶より以上を望むべからざる、壯絶痛絶一個サブライムの光景を目撃せり。
 余や今來りてかくの如き歴史を有せる大鐵道を陥んとす、また何等の光榮ぞ。

(二)

余が曩に引用したるマダム、オーゴルマンの紀行の一節に曰く「われ等は少なくも發車の二時間前に停車場鳥港停車場に行かざるべからざる事を告られ、七月二十九日の早朝ホテルを立出てたり、二人の白耳義人ありて、われ等と同行する事となり、都合四人連となりたれば、豫じぬ手筈を定め白耳義人等が切符を買ひくる、事、われ等はまた荷物の番をなし居る事とし、さて停車場に到着し見たるに、

何事とも知れず、凄まじき叫喚の聲湧くが如くに聞え、何さま容易ならぬ椿事にも起りしもの、如く思はれたれば、佛蘭西語を繰つり居たる露人に向ひて、何事なりやと尋ねしに、彼はこの問を怪しむもの、如く、今丁度列車の到着せし處にて、恰かもこの列車に乗込まんとして來れる旅客と、列車を下りて停車場を去らんとする旅客とが、互に道を求むるため相争へるなりと答へたり、實に信ずべからざる驚ろくべき夥々の音は刻一刻に高まり、われ等の耳も聳せんとする許りなり、われ等はまた正眞の二時間を、争闘と苦悶の間に費やしぬ——それは最初には切符を得るがため、次には荷物を預けその荷物の列車に積込まるゝを見届くるため、最後には列車内にわれ等の席を求むるためなりき、殊に列車に乗込む折の如き、斯る競争をこそ誠に死物狂ひとや云ふべき、われ等のために道を開かんと

する白耳義人は、全く疲れ果て、全身汗まみれとなり、我等と同じく競ひ居たる亞米利加の一新聞記者は、野球に苦闘したる如く――苦闘して負けたる如く感ずと語れり」と、あゝそれ然る乎、果して然らば、十九世紀の大雄圖として、一世を驚ろかしたる西比利亞鐵道の發着點は、更にまた世人を驚倒すべき状態にありといふべし。

田邊工學博士の著書『西比利亞鐵道』中、その附録旅行日記の一節はまた曰く『五月十九日金角樓(烏港の旅館)を午前七時に發し烏蘇里停車場に行く、流車の發するは午前九時二十五分なれども、切符を買ふに手数を要せんことを慮り、發車前二時間に達するやうにしたるなり、然るに或は露國の官吏に先取せられ、或は數日前既に切符買取りの申込をなし置るもありて、その混雑名狀すべからず、遂に發車時刻を過れども切符を買ふ能はず、而して午前十時頃に至り一聲の汽

笛と共に列車將に出發せんとす云々、またこれオーゴルマン夫人の記事を有力ならしむるもの、人をして烏港停車場の、眞に驚ろくべき一個人世の苦闘場なるを思はしめずんばあらざるなり。

蓋し烏港停車場における汽車の發着は一日只僅に二回あるのみ、即ち露都ペテルブルグに向け發するものと、ペテルブルグより着するものとこれなり、余以爲らく、斯の如きは實に烏港停車場をして、人類の苦闘場たらしむる所以ならんと、あゝかくの如き停車場の光景を描き出さんとするもの、またこれ新聞記者としての一快事にあらざる事なきか。

余は實に斯の如き希望を以て、八月十五日朝八時半、烏港の杉浦商會主及下村君と馬車を同うして、停車場に至りぬ、停車場に着せるの時、正に發車定刻に先だつ事僅かに十分、余や心私かに列車に搭

ずる能はざるを期せるなり。

(三)

されど來りて見れば、全くその意外なるに驚ろきたり、そは至つて平穩無爲にして、毫も苦闘の光景を見出す事能はざればなり。見送りのものが獨りプラットフォームに立てるのみならず、見送らるゝものも、はた他の乗客も發車を待つ間の所在なさに、悠々としてプラットフォームの上立ち、若くは逍遙しつゝあるを見る、加之余より十分前に切符を買調ふべく來れる杉浦店員は、既に余の切符を購ひありて、何の造作もなく、余は一等車室中の人となるを得たるなり、何ぞそれ意想外なるの甚しき、要するにその混雜なるものは之をわが東京大阪の停車場に比して、更にヨリ甚しきものあるを見ず、余は啞然として自ら失笑しぬ。

後余は之を同行の永取君に質して、鳥港停車場の苦闘を説くの、寧ろ謂れなきを知りぬ、その出札の如き、發車一時間前よりし、且改札所の設なくして、乗客は直ちに客車内に入るを得る故に、随つて集れば随つて客車に入り、敢て日本の停車場に於て見るが如き混雜を生ずる事なし、此點より考ふるも、オーゴルマン夫人の説く處の如き、寧ろ甚しく過大に失するなきやを疑ふ、或は單に斯の如きは過去の夢にあらざる事なきか、或は一週三回のイルクック發急行列車に接續すべき分のみが、混雜を生ずるにあらざるなきや、且西比利亞の各驛においては、定員以外の切符を發賣せず、故に日本の車室内に見るが如き紛擾は之を西比利亞の鐵道に見るべくもあらず、切符を買はんとするがためには、或は多少の混雜を生ずるあらんも既に切符を得たるものは、必らずその所定の席を得ざるなく、二等

車の乗客にして空しく佇立せざるべからざるが如きは殆んど無き處とす、たゞ往々切符の賣切は免がれざる處なるが故に、一二等車によりて歐露に赴むかんとするもの、如きは、數日前よりその申込をなし置くを賢しとするのみ、その道を盡す時は、最も愉快に最も安樂に汽車汽船の旅をなし得るは西比利亞の内地なれども、豫じめその道を盡さざる時においては、最も不便にして、極めて不快なる旅行を續けざるべからざるも、また西比利亞の内地なる事を忘るべからず。

余は西比利亞において多くの野蠻を見たれども、慥かに烏蘇里鐵道においてその文明を見たり、余は敢て烏蘇里鐵道を以て、卓越なる鐵道と稱するの勇氣なしと雖も、之を日本の鐵道に比しては、多くの優秀なる點を認めずんばならず、乞ふ烏蘇里列車のアウトライン

を諸君の前に描かしめよ。

鐵路の軌間は五呎の廣軌にして、客車の外壁は鐵板を以て圍み、等級に應じて一等は青色、二等は褐色、三等は綠色に、いづれも鮮麗に全部を塗れるが故に、獨りその見易きの利あるのみならず、外見の軀裁もまた甚だ美事なり、その構造の堅固なる恰かも金庫の如く列車の幅頗る廣きに、天井また之に準じ、手荷物如き、之を天井に上るがためには特に梯子の具付あり、腰掛もまた甚だ幅廣く、柔らかなる毛布團を敷ける上を、清潔なる紅白ダンダラの露西亞更紗を以て蔽ひ、而して夜間はその寄掛れる部分を起す時は、幅廣き寢臺となすを得べく、一等室二等室共に然り、一等室は一人一臺を占領すべく、二等室は二人一臺を用ゆべし、而も幅廣くして長きが故に、矮小なる日本人の如き、優に三人を臥せしむるに足るべし、殊

に一二等室の如き、相對せる一區劃中一個宛の寫字臺あり、列車の重量最も重きが故に、その動搖甚だ少なく、優に寫字臺によつて、手紙を認め、また書を読むべし、かくの如きは日本の鐵道によつて旅行するもの、最も羨望に値する所ならん。

(四)

車室はその一方を通路とし、各室の通路には扉の設あれども、この扉は自由に開閉すべく、一二三等を通じて隨意に通行し得べし、各室寒暖計及び蒸氣暖房あり、冬季は二重窓を密閉するが故に、毫も寒氣を覺ゆる事なしといふ、只邦人の目に最も奇異に感ぜらるゝは烏蘇里線において夜間石油または電氣を用ゐず、蠟燭を以て點燈するの一事なり、露西亞の蠟燭は最も有名なるものにして、一本少くも八時間を保つといふを以て知らる、故に鐵道以外各家の食卓等

において蠟燭を用ゆるもの甚だ多し。

毎列車必ず食堂車あり、その清潔なると、その窮屈ならざるは、日本の食堂車に見るべからざる處なり、一隅に賭部屋あり、臺上に數瓶の酒と、數種の肴を陳列し、肴には桃紅色の透明なるレイスを蔽ひ、恰もかゝるレイスの女の顔を一層美ならしむる如くに、肉の味はひをも更に一層美なるが如く感ぜしむ、而もこゝに來りて一杯の酒を飲むものは、その酒のみの代價を以て、臺上の好める肉を食ふを得べし、これ獨り食堂車中のみならず、露國の俗他の珈琲店及び飲食店等においても、臺上に必ず價無き調理せる冷肉を置き酒客の自由に取られて食ふに任す、唯露人において猶且つ推重すべきを見るは、その價無きの故を以て、敢て食ばり食ふものなきの一事なり。

毎列車必ず食堂車を附するの外に、各驛の停車場内には、多く整頓せる飲食店を有す、而して各驛多くは十四五分の停車時間を有するが故に、列車に飽きたるの旅客は自由に下車して、飲食を取るを得べし、これ等の飲食店はまた一の半官的の事業に外ならざるが故にその價の廉なるは、旅客の最も至便とする處ならん。

烏蘇里鐵道は軍事的鐵道にしてその勤務は擧て烏蘇里鐵道大隊の任ずる所なり、故に機關手を除くの外は、悉く軍人の手によつて處理せられ、驛長は重に將校を以て之に充て、下は驛夫、シグナルメンに至るまで、またコサック兵士にあらざるなし、故に業務の執行の如き頗る圓滑にして、ヤ、整頓の狀を呈するもの、如し。

然れども鐵道の運轉は決して機敏なりといふべからず、彼が如く廣軌鐵道を以てして、一時間の速力十五哩以内に過ぎず、斯の如きは

畢竟運轉の技術進歩せざると、局に當るもの、敢て運行を意に介せざるに依るのみ、或は燃料に薪を用ゆるが爲なるを説くものあり、然り、薪を用ゆる時は、石炭二倍の量を以てして、猶石炭の火力に及ばず、その快速力を出す能はざる事いふまでもなきなり、然れども烏蘇里線は、近來全く石炭を用ゐつゝあるものなるが故に、その速力の敢て燃料に關せざるや知るべし。

その速力斯の如く遅緩なるに、停車時間の甚だ長さも、また頗る旅客を倦ましめずんばならず、然れども露人の旅行者に至つては、時刻の正確にして速力の速ならんよりも、食事と手洗時間に充分にして、たゞ愉快に旅行し得ん事を望み、敢て列車の時間を問ふものなし、乗客にして意に介せずとせば、局に當るもの、顧みざる當然のみ、蓋し露人の如き時間の觀念に乏しく、且甚だ遅鈍にして不器用

なるものは、鐵道事務の如き極めて機敏を要する業務に適せりと思はれず、試みにその一例を舉れば、出札掛の如き、旅客に對し、分り切りたる剩錢を出すにも、正當に胸算をなす事能はず、ために徒らに長時間を費やし、非常の混雜を來さしむるが如き、殆んど齒搔さに堪へざるものあり、露人がその資本、その材料、その機關手まで悉く自國にて供給せりといふを以て誇れる、西比利亞鐵道の緩慢なる、何を怪しむを須るん。

(五)

余の烏蘇里鐵道を経験せる、僅かに烏港よりニコリスクに至る六十八哩間に過ぎず、然れども何處に行くも、その變化を見る事なき、西比利亞内地の風光は、また略この六十八哩間に盡せりといふを得べし、乞ふ試みにこの間の風光を語らん。

列車は漸やく市中を横断して、黒龍灣に出で、沿岸を縫ふ事數露里此間灣頭の風景何の奇なく、只一碧鏡の如き水面に篷帆の支那船輕く懸るを見るのみ、轉じて内地に入るに従つて、景色自から大陸的趣味を帯び來り、いたく北海道の風景と酷似せるものあるを認む、ニコリスクに至るの間セタンカ、ヒルコツフ、ボヅゴローヅニ、ナゼチンスカヤ、キバリソフ、アラスドリノエ、バラノフスキー等の各驛あり、ヒルコツフは近時石炭の産出を以て知られ、露政府二百萬留を投じてその採掘に従事せるの地、その果して成功するや否やは蓋し未定の問題なり、アラスドリノエ驛は綏芬河の左岸にありこの地朝鮮の北境及び滿洲吉林より烏港に入るの要路に當れるより露大いに兵備を嚴にし盛に兵營を建設し、嚴然たる一大城廓の觀ありしむ、然れども兵備の嚴なるは獨りこの地に止まらず、烏蘇里鐵

道の沿線、悉く兵營砲壘を見ずんば、到る處兵士が天幕を張りて野營せるを見ざるなく、その武を用ゆるの盛んなる、眞に人をして一驚を喫せしむるものあり、然れども日本人が金を出して雇はんとすれば、來りて快く勞働に従事し只命これ從ふも露國の兵卒なる事を忘るべからず、兵營内に婦人を容るゝ事を怪しまざるも露國の軍人なるを忘るべからず、行軍中に豆菓子を食べ、歩行するも、露國の兵士なる事を忘るべからず。
アラストドリノエよりニコリスクに至る間の幾哩は所謂西比利亞の大曠野に屬し、眺望の空濶なる、また北海道の比にあらず、漠々涯際なきの郊野には百合、撫子、萩、桔梗、釣鐘草、女郎花、鳥兜、龍膽及びその他の鐘狀花科、旋花科等の花卉、夏季二三ヶ月間を植物界の天地としてあのく絢爛の美を競ひ、滿地これ綾羅を織れるに

異ならず、北海道の郊野に比して、更に多くの花を着け、その色彩において最も多く紫を加ふ、旋花科鐘狀花科の花卉、その色多く濃紫にして、野に静寂の趣味を加ふる事一段、而して潑々たる殷紅燃ゆるが如き色を見ざるは、また自然が西比利亞の野に相應しからしめたる好配色と謂ふべし。
かくの如き郊野の間一條の綏芬河あり、列車或は河に就き、或は河に離れて走る、潤葉樹の林そこを隈取りて、水流のその間に隠見せるあり、極めて緩漫の大傾斜をなせる丘陵の一波一瀾、宛がら奈良の嫩草山を押潰して凡十分の一の高さとなし、更に之を數十倍に擴げたる如きもの、幾十相接するあり、或はその丘に配するに、二三の潤葉樹を以てせるあり、或は、*The white ladies of the forest* (林間の白婦人と稱せらるゝ白樺の、その雪の如き肌理を臚列して、丘を

纏ふの帯となれるあり、或は妻々たる牧草のみにして一木をも生ぜざるあり、この丘かの水の邊、往々にして牛馬の群をなして徘徊せるが豆の如く小さきを見る。

斯の如きの光景をその高さにある時は見下し、低きにある時は見上げ、或は高低を同時に俯瞰して、かの金庫の如き青緑の列車は般々無人の緑蕪を振撼し、遠く地平線に向つて過去る、またこれ一個の大觀たるかな。

(八) 烏拉地俄斯德

烏拉地俄斯德港は彼得大帝灣に突出せるムラゾイヨフ、アムールスキ半島の南端にあり、露人之を金角港と稱す、灣形半靴状をなし長四十町強幅約八町、灣の形状としては間然する所なく、東西南の

三面は悉く二百呎より七百呎に至る連山を以て圍繞せられ、港口には露人島の横はるあり、四面風伯の犯すなく、灣内水深くして自由に巨艦を操縦するに適し、五千噸の巨船六十隻を同時に碇泊せしめ得べし、かくの如き良港は日本海の沿岸また求むべからざる所、否かのクロバトウキンをして世界第一の港灣と稱せしめしもの、また決して偶然にあらざるを見る、蓋し冬季四ヶ月の結氷だになからしめば、烏港は優に世界第一の良灣の名を擅にせしなるべし。

烏港は軍港なるが故に、之を四區に別ち、その第三、四區にのみ外國船の碇繫を許すに過ぎず、露國軍艦の碇繫場は第一區にして、實にまた東洋艦隊の策源地たり。

烏港の家屋は丘陵によつて之を營むが故に、巨屋鱗次して次第に高きに及び、展望の壯重なる、たしかに日本の各開港場において、矮

屋をのみ見馴れ來れるものを一驚せしむるに足る、殊に余の來れる時の如き、彼得大帝灣上多少の瓦斯を帯び、煙霧の間より、層々高きに連なるの市街を望む、眞にこれ一幅唇氣樓の咫尺に現出せるに異ならず、人をして覺えず偉なる哉の嘆聲を發せしめぬ、露國滿洲より此地を奪ふて僅かに四十年、今日遂に斯の如き大都市大港灣を經營す、また壯なりと謂ふべし。

烏港の人口は精密なる統計の表示すべきなきも、約四五萬を下らざるべしといふ、冬季を除き、春季より出稼ぎ來れる支那人朝鮮人を加ふる時は、優に十萬に達すべし。

然れども烏港は到底人類の樂園にあらずして遂に天然と人類との苦闘場たるを免れず、アングロサクソン人が烏港を評して「半年は氷に閉され、三ヶ月は霧に閉され、残る四分の一年は雨に閉さる」と

なすもの、また必らずしも酷評といふべからず、天然が四時烏港を苦しめつゝあるの慘なる、眞に驚ろくべきものあり。

元來烏港は日本海に接すると雖も、その温暖なる黒潮は北海道に向つて去り、却つて北緯靑海峽より南流し來る寒潮に接するが故に、冬季は極めて酷烈の寒氣を覺え、夏季はまた日本海より來る温暖なる南風及東南風の、その寒潮のために冷却せらるゝあり、盛んに霧又は雨を生じ、極めて空氣を濕潤ならしむ、空氣の濕潤なるは實に烏蘇里地方の名物にして、一年の強半は濕氣を帯び、夏季においてその頂點に達す、烏港の如き家屋内隨所に微を生じ、菌を生じ、木材は膨脹し、鐵器は酸化し、飲料水は全く溷濁す、殊に六七の二ヶ月の如き連日濃霧を生じ、或は雨を降し、偶々濃霧なき日は暑氣猛烈にして呼吸爲に苦しく、日蔭において寒暖計九十度以上上る

事珍らしからず、只秋季のみ降雨濃霧共に減じ、好晴の日を見る事多きも、冬季に至つては北風及西北風常に吹すさみ、その勢頗る猛烈を極め、春夏に引かへて甚しく空気を乾燥せしめ、木材はために乾縮し、家具は破裂し、護謨製の器物は弾力を失するに至る、寒暖計は往々氷點以下二十七八度に下り、海面は氷結して車馬氷上を通ず、數年前の統計によるに、一年間鳥港における晴天は僅かに百四十四日にして、残る二百二十餘日は飛雪、颶風、濃霧、降雨、強風等なりしといふ、斯の如き劣悪の氣候は世界廣しと雖も、その儔を求むる事難かるべし。

只夫れかくの如き劣悪の氣候なるにも拘はらず、露人の之がためにその害を受ける事甚しきを見ず、否在留邦人すらも之に馴れて、甚しくその惡氣候を意とせざるを見るに至つては、人類が天然に對して

(九) 鳥港所見

(上)

如何にその苦闘を續け、はたその苦闘に勝ち得るかを知る事において、吾人はその教訓を得たるを多とせざる能はざるなり。

鳥港において旅客の注目を惹くものゝ一は、露國に特有なるその夥しき辻馬車なり、露人は之をイズツォーシツクと稱す、馭者と呼ぶ時は直ちに來る、馬は二頭立にして一頭は凄まじき弓を頂ける轎の中に、一頭は轆の外に立しむ、滿洲馬具(?)を以て之を飾り、ひしくと黄銅の鉞打つたる數條の長さ革紐をその背に結びつけ、恰かも滿洲騎兵の乗馬とも覺しきに、手綱を紋れる馭者を見れば、肥大猪顏豚の如き好漢、蓬々たる赤髯を満面に生せるが、異形の黒塗

帽を被り、上衣を着けずして、眞紅の露西亞更紗のダブ／＼せる襦衣を着け、青黒または黒色唐天鵝絨の胴衣及ズボンを着て、その馬具の物々しきと相待つて、たしかに街頭の一奇觀たり、日本人の馭者を稱して『赤鬼』と呼べる、その被服容貌の點よりするもの。その亂暴無比なるの點よりするも、蓋し最も意を得たるもの。馬車の構造は席の低き、彈器なき、ピクトリア形の四輪車にして、重に鐵を以て作りつけ、その堅牢なる、世界の如何なる馬車も、その右に出るものなかるべしといふ、蓋し斯の如く堅牢なるにあらざれば、全く凹凸參差たる西比利亞の惡道路を縱横に馳驅せしむるに堪へざるなり、只憐れむべきは馬と客とのみ、乞ふ斯の如き馬車が『赤鬼』の苦の下に、所謂縱横に馳驅するの光景を念頭に描き見よ、蓋し思半に過るものあらん。

英國の一人婦人は評して曰く『西比利亞の辻馬車に乗るは自動鐵道に乗るが如し』と、然り、忽ち高く揺上らるゝかと思へば、忽ち低く落さるゝ、似たり、甚しく危険なるが如くにして、必らずしも危険ならざる、似たり、只夫危険少なきも、乗客の甚だ安んずる能はざる、似たり、その傾斜の都度に遽然として膽を奪はるゝ、似たり、西比利亞觀光の外客が、西比利亞の辻馬車に三舍を避くるもの、決して偶然にあらざるを知らん。然れども都會の地にあつては猶可なり、一步市外に出でんか、更に一層凄まじき惡道路を、無二無三に疾驅せしむるの光景は、眞に人を驚ろかしむるものあり、或は水流沮洳の地に遭ふも、毫も念とすなく長鞭を擧て、一聲高く叱咤し、之を躍り越えしむること、恰かも劉備が瀟溪を越ゆるもかくやとばかり、こゝに至つてはその危

險實に言語に絶するも、馭者は只平然『ニチエオー』(何でもなしの意)を唱へ、客を顧みて苦笑一番するのみなりといふ、蓋し『ニチエオー』は露人の常套語にして、この語多くの場合に、露人の口を衝いて出づ、余もニコリスクにおいて、亂暴なる馭者のために殆んど泥濘の中に跳飛されんとし、彼を叱するに當りて、忽ち『ニチエオー』を極つけられたる事ありき。
翻つて思ふ、馭者の『ニチエオー』は實に露人の長所を代表せるの聲なり、露人の無感覺なる、如何なる困難と痛苦とに逢ふも、常に『ニチエオー』を唱へて、敢て意に介せず、彼の大なる所以蓋しまたこゝにあつて存す、聞く往年ビスマーク駐露公使たりし時、馬車を雇ふて急に帝室御獵場に赴むかんとす、然るに馭者悠々として敢て馬車を進めず、ビ公督促する事急にして、彼忽ち叱咤一番、馬に

鞭を加ふると見る間に、馬車は高低甚しき阪路を蔭地に駈出し、幾多の難所を飛越え跳越え、爲に轉覆せんとする事數回、ビ公大に驚ろき之を制すれども、馭者は唯笑つて『ニチエオー』を唱ふるのみ、然れども馬車は遂に轉覆し、ビ公と馭者と共に路上に投飛されたり、ビ公激怒して馭者を叱すれば、彼平然として只『ニチエオー』を繰返しつゝ、悠々としてまた馬車を起し、再びビ公を乗せて進まんとす、ビ公大いにその態度に感じ、深く悟入する所あり、後『ニチエオー』の文字を指輪に刻し、以て外交の秘訣とせられたりと、またこれ一場の佳話、『赤鬼』のために氣焔揚る事萬丈。

(中)

西比利亞の都市には必ずバザルあり、都市の要するあらゆる野菜魚肉牛豚肉日用雜貨等を販賣す、烏港のバザルは海岸通り、公園と

税關埠頭との間にあり、百數十の店を街路の兩側に並列して之を販ぐ、所謂市場なり、多く皆支那人にして露人は僅かに四五人を見るのみ、日本人の如きに至つては一人も無し。之を販賣するもの素より下等の支那人のみ、その不潔なる集合より發する一種の臭氣と、魚獸肉野菜等より發する異臭と凡て一となり周圍の亂雜無趣味なる光景と相待つて、紳士をして殆んどその圈内に投ずるを耻ぢしむ。こゝに集ひ來るもの、料理番あり、下婢あり、農夫あり、朝鮮人あり、鞆靴人あり、カラカーズ人あり、異種異様の風俗を網羅せる中にも、殊に多く見かくるは、單純なるその美術嗜味を表はせる赤、青等の衣服に、赤または稀に紫更紗の模様を畫ける頭被を戴き、まゝその徒足なるものをも見受くる下流の露國婦人とす、然れども中

流以上の婦人にして、良家の妻女たるものも、敢てバザルに來る事を、その躰面に關せりとなさず、自から籠を提げ、そのヴァイオットの香氣に馴れたる嗅覺もて、紛々たる異臭を嗅て怪しまず、その肉かの野菜を購ひ、織々たる細腕もたゆげにひツさげ歸れるを見るその質素の風眞に人をして床しさに堪へざらしむ、また我邦女子の一顧に値すべし。斯の如きバザルは互寒凜烈の際と雖も一日も廢せず、彼等が寒風に暴露し、全身氷柱を帯びて、業を營なむの勇氣眞に驚ろくべきものありといふ、牛乳の如き液躰すら、尙薬に通されて鬻がる、冬のバザルは、眞にこれ一個の奇觀たるを失はじ。このバザルより海岸にかけて蠢動せる、幾萬の支那及朝鮮労働者を船上より見るの光景はまた實に驚ろくべき偉觀なり、その灰色にな

れる白衣と鼠色になれる青衫と、結髪と辮髪と、錯綜し、交互し、戦場の如く、火事場の如く、右往左往に入り亂れ、紛糾して海岸に腐集するの様、始め之を遠きより望む時は、山の如くに襜褕を廣げたるに異ならず、漸やく近づくに従つて、次第にその蠕動するを認め始めてその人類なる事を知るもの、誰か呆然として自失せざらん、これ何人も烏港に来るもの、經驗する所。
乞ふ試みに一步埠頭に上らんか、諸君は忽ちこれ等一群のクイリーに取巻るゝを見ん、而してクイリーが争闘を始むるを見ん、諸君が進退に窮せるの時、美髯赭顔の露國巡查忽ちにして來り、物をも云はずその太き棒を以てクイリーを擲りつけ去るを見ん、斯の如きは幾萬の支那人及び朝鮮人の生活にして、また彼等が露國より受つゝある待遇の一般なり。

然れども彼等を以て憐れむべきものとなす事勿れ、日本人よりも甚だしく憐れむべきものとなす事勿れ、かくの如きのクイリーも一年必らず百金以上を露國の富より奪ふて自國に運び歸れるなり、烏港の市街に堂々として立る永和棧、同利、義泰等の大商店を見ずや、その盛大なる、日本の商人をして全く顔色なからしむ、日本人が露國の富を自國に運び來るもの只一の醜業婦あり、獨り支那人に至つては次第に西比利亞における露國の經濟を自家掌上のものとなしつゝあるのみならず、今日西比利亞の農業は殆んど擧て支那人の手に經營せられつゝあるなり、西比利亞における支那人の勢力は、事實において殆んど露人に優る、支那人が斯の如き勢力を養ひつゝあるもの、一に世界無比を以て稱せらるゝその協同力の大なるにあり、彼等は數十人猶善く相合同し、その零碎の資金を集めて克く日本の

大商店に匹敵するものを形作れるなり、而してかくの如くにして成れる商會もまた更に大合同を試みて、貨物の大輸入を企だつるを常とす、乃ち大輸入を企つるが故に、今回新たに課せられたる重税の如きも必らずしも意とするに足らず、以て市場の利益を齟齬し、三人の合同商業すら猶難しとする日本人をして、全く遺利を拾ふの餘地だも無からしむ、日本人が今春以來續々破産者を出しつゝあるもの寧ろ自然の數のみ、また誰をか怨みん。

(下)

スヴェトウランスカヤ街に博物館あり、下村君及び杉浦商會の宮越君に伴はれ、行きて見る、前庭に三個の石像及一個の石碑を安置せり、共に古の双城子たる今のニコリスクにおいて發掘する所に係る碑は只飛龍の形を見るのみ、文字磨滅して讀むべからず、石像の二

は僧侶の立像にして何れも頭部を存せず、一は狛狗にして、形狀の古雅なる共に千年以上のもの、蓋し渤海女眞の技術を表示せる好標本たり、あゝ千年の後再び世に出て、露人のために館を護る、石人や、石獸や、若し靈あらば、その所を得たるに泣かん。

館は二層の石造家屋にして甚だ大ならず、館内の陳列方法の如きまたその當を得ざるもの多く、蒐集せる材料も甚だ少なし、余の如き始めマンモスの遺骨を藏せるを聞き、最もそを見ん事を欲したるもの、然れども見るに及べば只その齒牙脚骨等の斷片に過ぎざるのみ、然れども鳥港が一個の博物館を有せるは、既に誇とするに足れり、その不整理不完全の如きは寧ろ之を責むるの酷なるを見る、況んや東部西比利亞における史的及地學的的材料は可なりに多く蒐集しあるを見るをや、且その最も多とすべきは無料にて縦覽せしむるに

あり、余等の館を出んとする時、館守の一老翁縦覧人名簿を出して姓名の自署を請ふ、余等則ち名を署して去る。

館内庭園の一隅に賣花店あり、暖室を設け、盛んに諸種の花卉を培養し、妖紅魏紫すべて一堂の中にあり、宮越君その數鉢を購ふ、秋海棠の一鉢も價なほ一留以上、不廉なる驚ろくべし、蓋し露人はその没趣味なるに似ず、花を愛するの民なり、烏港の如き庭園を有するの家屋に至つては則ち無きも、殆んど何等かの花を爐邊に養はざるの家無し、故に日本より輸入さるゝ花卉類は極めて露人の歓迎を受くといふ。

余等の店頭にある時、西比利亞の寵兒たる瀟洒紅顔の青年露國士官來り數朶の薔薇花を購ひ去る、云ふまでもなく今宵スヰートハートの胸邊を飾るもの、蓋し一輪善く五十哥を下らず、最も賣花翁の懐

を暖ならしむるもの、實にかゝる戀の贈物に外ならざるなり、紅粉青娥常に人を惱殺す、金章紫綬漫に花を買ふ、洛陽繁華の子、長安輕薄の兒、移して今之を烏港に見る、宛然これ繁昌記中の景。

博物館に隣り、アドミラル埠頭に當りてニコラス歡迎門あり、純露風の建築にして四脚より成り、上に綠色に彩れる尖塔を置く、四周は塗るに露人の好める種々の色彩を以てす、千八百九十一年、我明治二十四年五月、時の露國皇太子今のニコラス二世、紀念すべき大津湖畔において狂漢津田三藏のために斬られ、縋帶未だ解くに及ばず、始めて西比利亞の地にその第一歩を投じ、顔色憔悴として巍然たるこの門を潜らせらる、塔の如きの官民情をなす事如何ぞや。

當時各所の寺院においては盛大なる祈禱會あり、露人の激昂殆んどその頂點に達し、在留邦人の如きは多く屏息して出でず、只災の家

第二編 (烏港所見)

宅に及ばんことを恐れたるも、露人の激昂は素より日本人の激昂とその種類を異にせるが故に、遂に一人の日本人に危害を加ふるが如き馬鹿ものを出さざりさといふ、然れども現皇の遭難記念日は、今日において長く暗黒の日として全露國に記念せられ、官民商買共に業を休みて、その日を忘れざるを期す、邦人たるものニコラス門に來りて、豈多少の感慨なきを得んや。

(十) チヴェリスキー記念碑畔の落暉

八月十七日午後七時宮越君等と共にチヴェリスキー記念碑畔を逍遙す。碑はスヴェトランスカヤ街にあり、偉大なる聖ニコライ寺院の下、傾斜面の海に面する所に立てり、碑畔は一小公園をなし、桃紅色の

輕衣を纏へる若婦人、暗青色のユニホーム着たる軍人 三々伍々此中に徘徊せるを見る、花木の配置頗る日本趣味を表はせるは、碑と園と共に日本人の手に成れるが故なり。碑は花崗石を以て壘み、高さ三十五尺、その基部にチヴェリスキー將軍の半身像を置く、將軍は始めて韃靼海峽を探險し、黒龍江口のニコライフスクを占領したるの人、露人が彼を紀念するまた至れりといふべし、碑前を過ぎるの兵士を見るに、必らず舉手敬禮せざるなし。乞ふ碑の頂上を仰げ、帝冠を戴ける双頭の金鷲、傲然として兩翼を張り、地球を踏んでその上に立ち、南面して高く金角灣に臨むを見ん、この金鷲や露の大志を最も露骨に表現せるもの、その意氣堂々として眞に宇宙を呑むを見ずや。

乞ふ更に眸を轉じて、金鷲の俯視せる金角灣頭を望め、ウラジミルセバストポール、ルシア等東洋艦隊に屬せる一萬噸以上の巨艦數隻常に嚴然として域廓の如く、脚下に遊弋するを見ん、何ぞ其壯なるや。
若し前面露人島を隔て、一髮の青を認め得ば、その日本海なるを知れ、然れども露人島の上に、プロチカ山の上に、セメノフ山の上に、クレコフ山の上に、烏港を護るあらゆる丘陵の上に、隠見出沒せるものは、ことごとくこれ砲壘なる事を看取せよ。
碑や園や日本人の營める所に立つて、われは露が蓋世の雄圖を目前に俯仰す、豈多少の感慨なからずやは。
忽ちにして陰雲開き、西丘落日を漏らすあり、熾然として双頭の金鷲を射れば、金色の光明燦爛として、四邊に映發し、烈々の威風暫

くも之を仰ぐに堪えず、ウラジミルや、セバストポールや、また落陣を受けて百千のイルミチーシオン、一時に點じ來れるが如く、黃焰瞳々として海まさに燃えんとす、その莊嚴雄偉の光景天下何ものか之に加ふべき。
然れどもこれ只瞬間のみ、落日全く西丘に入り去り、層雲再び西空を鎖せるの時、海天蒼茫として夕暮の幕は既に落來り、かの金鷲や再び金色の燦爛たるを見ず、之を仰げば兒戲の如きのみ、海や、軍艦や、一樣の鈍色に包まれて、次第に黒闇々の裡に没し去んとす、顧みて曩の莊嚴を思ふに夢よりも果敢なし、榮華と凋落と眞にこれ一轉瞬のみ。
碑と園と日本人の營めるものなりせば、何が故にまた日本人の有たらざる、金角灣頭數隻の露艦を浮べてわが箱庭となす、また可なら

ずや、同行の友と共に呵々大笑して紀念碑畔を去る。

(十一) 西比利亞に於る日本賣春婦

(一)

東洋において最も有名なるもの、一は日本人の賣春婦なり、東洋の天地を狭しとして、到る處に濶歩せるものは實に日本賣春婦にあらずや、かくの如き賣春婦が、東洋西南洋乃至亞非利加の果まで横行し居る事は、知らず同胞のために誇るべきか、將た恥づべきか。蓋し日本の國家が、斯る醜業婦のために恩惠を受たるや鮮しとせず常にわが東洋移民の先鋒をなしつゝあるものは醜業婦なり、比較的多く他の富を吸収しつゝあるものも醜業婦なり、西比利亞の如き殊に最も然り、醜業婦なかりせば、烏港の日本人は今日の發達を呈

せざりしならん、烏港と日本と今日の如く接近する事能はざりしならん、ニコリスク然り、ハムロフカ然り、西比利亞において日露を近接せしめたるもの、實に賣春婦の力ならずんばあらず、世間醜業婦が國家の軀面を傷くるを慨するものあるも、遂に醜業婦獎勵の潜める聲を打消す能はざるはこれがためなり。然れども斯の如き賣春婦の驥尾に附せざれば、膨脹し能はざるの國民は、如何なる誇を有せる國民なるか、斯の如き賣春婦を待たざれば、他の富を吸収し能はざる國民は、如何なる面目を有せる國民なるか、西比利亞における日露の近接が、賣春婦の媒介による事を、光榮とせざるべからざるわが同胞は、抑も如何なる誇と面目との下に、自ら標榜せんとするぞ。東洋諸港において幾度か日本人を赤面せしむるものはかゝる賣春婦

なり、現に余等の如き、白晝鳥港に上陸し、海岸より馬車を雇ふや
馭者先余等を顧みて女郎屋行ならんと笑ひ問へり、ニコリスクにお
いて停車場より雇へるの際も、馭者また問ふに日本人街かとの言を
以てす、日本人街は即ち賤業婦の巢窟たるなり、露國の卑賤者より
かくの如き親密(一)の問を發せらるゝ事が、則ち日露の近接なりとせ
ば、賣春婦は實に余のために、面目を施さしめたりといふべし、然
れども斯の如き面目を味ふ事が甚だ愉快なる經驗なりや否やは、諸
君自ら説あらん。

若し余をして地を換へ、他の外國人ならしめば、余は極力日本の賣
春婦を罵り、其賣春婦政略もしありとせばを攻撃して餘蘊なけん、
然れども余は日本人なり、賣春婦はわが同胞なり、此故に余は自ら
罵るべからず、また漫に同胞を憎むべからず、これ余が西比利亞
胞のために、讀者の同情を要求せんと欲す。

(二)

今日西比利亞に在住せる日本人の数は、正確なる統計なけれども、
四千を下らず五千を出ざるの間なるべし、而して賣春婦の数は約二
千と註せらるゝ、豈また盛ならずや、所謂日露の親交の賣春婦に依
て維持せらるゝ決して偶然に非ざるを知るべし。
烏拉地俄斯德の二十餘年前、始めて賣春婦に依つて開拓せられたる
が如くに、西比利亞の内地は今もなほ賣春婦に依て開拓せられつゝ、

あり、故に日本人のある所必らず賣春婦を見ざるなく、未だ日本人の入込まざる遠隔五寒の地と雖も、その先發隊たる賣春婦を見ざる事なし、かくの如き光榮ある賣春婦は、如何なる状態においてその光榮ある職業を営みつゝあるか、これわが同胞の知らんと欲する所なるべし。

世人もし彼等を目して、不正にその業を営み居るものとなすものあらば、これ甚しく彼等を誣ゆるものなり、彼等は決して密賣淫にあらず、露國政府の規定せる法律の範圍内において、正當にその業を営みつゝあるものなり、この故に余は西比利亞の賣春婦を説くに當つて、まづ露國の貸座敷營業規則を摘載するの要あるを見る、これ彼等が生活の狀態と密接の關係を有すればなり。貸座敷規則は日本のものに比して頗る文明的にして總て四十餘條よ

りなる、然れどもこゝには注目に値する點をのみ採萃すべし。

第一條 貸座敷の主人は三十五歳以上五十五歳以下の婦人に限る。

第六條 主人は四歳以上の小兒并に娼妓以外の婦人及親戚の婦女を同居せしむるを得ず。

第十二條 主人と娼妓の間には相方同意の上にて計算帳簿を調査するを得べし。

第十四條 十六歳未満の女子は娼妓たるを得ず。

第十七條 主人は娼妓の検査に必要な左の諸器具を備ふべし、

- 一、子宮鏡(一、二、三番形三個、一、検査壺一個、一、交接後使用すべき金盞
- 洗濯器、一、綿撒糸、一、木製ヒ數多

第十八條 主人は醫師の検査する外に毎日自ら娼妓を検査し健康上に疑ある時は決して交接せしむべからず。

第十九條 主人は娼妓をして身体を清潔ならしむるため下記の個條を勵行せしむべし。

- 一、屢々冷水を以て生殖器を洗滌せしむる事
- 一、交接の都度生殖器を洗滌せざれば他客と接せしめざる事且成るべく腰衣をも取換しむる事

一、毎週入浴せしむる事

第二十條 主人は娼妓が過度の交接によつて疲勞する事なきやう監視し如何なる事情あるも強て過度に交接せしむべからず。

第二十三條 娼妓は窓より首を出し通行人を呼入るゝ等の舉動をなすべからず。

第二十七條 日曜日及祭日には寺院にて夕暮の勤行を終るまで來客を謝絶すべき事

第二十八條 未丁年者及學生を登樓せしむ可からず。

第三十條 目に觸れ易き所に左の掲示をなすべし

來客はその選べる娼妓に向つて醫師の検査状を示さしむべき權利を有す。

第三十二條 貸座敷内において風琴以外の樂器を備つくるを禁ず

また來客をして骨牌等の遊戯をなさしむべからず。

第三十三條 貸座敷に於て酒煙草を賣るを禁ず。

第三十四條 貸座敷内に陛下の肖像を掲ぐ可からず。

第三十八條 貸座敷の賄女下婢は醫師の検査を受くべきものとす

醫師の臨檢せし時來合せたる婦人も亦検査を受ざるべからず。

第三十九條 主人は娼妓を親切に待遇し決して壓制すべからず。

第四十條 主人は金錢の貸借を以て娼妓の廢業を妨ぐるを得ず。

(三)

單に貸座敷營業規則をのみ對照し來る時は、日本において春を賣るよりも、寧ろ西比利亞においてするの安樂なるを思ふべし、然れどもかゝる規則の常に勵行され難きは彼我共に異なる所なし、且殆んど人外境とも目さるゝ西比利亞の天地において、朝に露人を送り夕に支那人を迎ふる事は、その苦樂に於てたしかに大なる徑庭を見るべし。

余は今彼等が如何なる状態においてその旦暮を送りつゝあるかを記すの前に、まづ彼等が如何にして西比利亞に來れるかを説く順序なるべきを思ふ、蓋し西比利亞と云はず、他の東洋諸港と云はず、日本の賣春婦を語ると共に、必ず聯想すべきはかの密航婦ならん、然り、西比利亞の賣春婦もその大部分は皆密航婦として來れるものなり、而して密航婦の語を聞く時は必ずまた罪惡を聯想するが如

くに、密航婦なる語は實に多くの罪惡に充つ、密航婦と聯關して共に離るべからざる少女誘拐の語は常にまた新聞紙の所謂第三面を充しつゝある暗黒文字なり、紡績の工女として少女を誘拐するも猶且人道の敵として呼ばる、況んや密航婦として無垢の少女を誘拐するものをや。

之をわが大阪に見るに、千日前の邊、川口の邊、梅田停車場の邊、必ず無垢の少女を狙ひ居る惡婆若くは無賴漢を見ざるなし、不幸にしてその餌となれる少女は、臺灣に、新嘉坡に、香港に、南洋に旅順に、滿洲に、烏拉地俄斯德に、所謂密航婦として、巧妙なる機關の許に護送せらる、只稀に警官の網に罹りたるものゝみ、その父兄の許に送られて再び光明を仰ぐ事を得れども、その大部分のものにあつては生きて又父母兄妹に見ゆべからず、長へに此世に消滅し

て、父母や兄妹や、日に探り月に哭すれどもその所を知らず、身は
獨り千里の異域に大墮落を遂げ、遂に骨を砂塵に委して千秋無縁の
鬼となる、人生の惨事これより甚しきものあらんや。
西ベリアにおける日本の賣春婦は現在において二個の關門より吞吐
せらる、即ち滿洲鐵道よりするものと、烏港よりするものと是なり
然れども滿洲鐵道よりするものは最近に屬し、賣春婦の大部分は烏
港の關門を通過し來れるものにして、滿洲を通過せるは寧ろ變則た
るを免れず、烏港は實に依然として最大最要の關門たり。
西ベリアの賣春婦は北陸邊のもの大阪中國邊のもの及び九州重に長
崎附近のものを含む、然れどもその歴史的關係よりして、大多數は
實に長崎附近の子女なり、乞ふ余をしてかくの如き子女が如何なる
方法の下に烏港に來るかを説かしめよ。

目下烏港において婦人誘拐者に支拂ふ金額は、一人に對し約三百留
三百圓強を普通とす、故に三人を誘拐し來れるものは九百圓を得べ
く、五人を誘拐し來れるものは千五百圓を得べし、世焉ぞ一文錢の
資本なくして、一時にかくの如き金儲をなし得る商賣あらんや、如
何なる法律の制裁も、遂に誘拐者を絶つ能はざるの理は、誠に明々
白々なりといふべし。

(四)

賣春婦の輸入には種々の法あり、余が後に記さんとする純然たる密
航婦の外に、輸入すべき女をわが妻として獲たる旅券の下に公然上
陸せしむるものあり、また西ベリアに家族的移住をなすとの口實を
以て、一家族の旅券を獲たる後、兩親その他の家族には故障を生じ
たりとの理由を以て婦女子のみを引連れ、渡航し來るもの等あり、

これ等は公然法網を潜れるの徒なるが、更に驚ろくべきは鳥港に
いて時計店小間物店等を出し、相應の商人として知らるゝものにし
て、子守または下婢として、日本より少女を連れ來り、それを娼樓に
賣りつゝあるもの甚だ少なからざるの一事なり。
かくの如き名目の下に連來らるゝものの中には、素より合意の上な
るものなきにしもあらざれども、元來鳥港の如き破落戸上りのもの
の跋扈し居る處にては、在留日本人間の制裁甚だ薄弱なるが故に彼
等の相當なる商人たるに誤られ、給金の高きを喜び、且つ安んじて
婦女子を托するものあるを奇貨とし、許すべからざる無慘の罪惡を
犯すものを生ぜざるは蓋し數の見易きものならん、現に西比利亞にお
ける丁年未滿の賣春婦には、子守として連來られたるもの多しとい
ふを見ても、また此間の消息を解するに難からざるべし。

純然たる密航婦の中には外國船によるものと、日本形小舟にて冒險
的航海をなし來るものとあり、外國船によるものは料理番或は惡船
員の注意の下に、荷物の下積の間に、或は石炭室の底に、下等動物
だも尙且堪え難き汚臭と不潔との間に積込まれ、船最と嘔吐とのた
めに死に優るの辛酸を嘗め來るを常とし、而して鳥港に來るものは
東清鐵道會社の汽船によるもの最も多く、甚しきは露國軍艦による
ものすらありと稱せらる、これ等の露國船によるものは重に下士官
に賄し、その室に忍ばしむるものにして、露の如き腐敗せる下等官
吏を多く有する處にあつては、多額の賄賂を得る事と女を犯し得べ
しとの大慾望のために、喜びて密航の幫助をなさざるもの殆んど無
しといふ、豈咄々怪事にあらずや。
日本形の舟によるものは重に長崎及び肥前大村灣邊より出發し來

るものにして、これは長さ四間程の小舟に十人程の密航婦を乗せ、四五人の男込乗み、まづ朝鮮沿岸に渡り、それより沿海を傳ふて島港に来るものにして、普通出發の日より七十餘日を費やし、始めて目的地に来るを常とすといふ、天下冒險の事少なからずと雖も、名にし負ふ日本海の怒濤を凌ぐに、風浪に對する何等の設備なき僅かに四間縁の小舟を以てし、幾たびか死生の境を冒し、海路八百餘哩を踏破し來りて意とせざるに至つては、その忍耐と勇氣と、眞に驚ろくべきものあり、先年新俳優川上音次郎、貞奴と共に短艇を舩して東京より神戸に來るや、世人その冒險に驚ろかざるもの無りき、然れども之を前者に比する時は遂に顔色なきにあらずや、北極探險は歐洲學術界における無比の冒險と稱せらる、然れども遂にわが密航者の無謀なるに如ざるなり、あゝ斯の如き勇氣と忍耐とあらば、

天下何ものかわが過往を妨ぐるものあらん、悲しいかな、彼等は只賣春婦なり、只誘拐者なり、日本の發達に何ものをも加へずして、加ふるものは獨り國辱のみ。

(五)

かくの如き密航者の中には樓主と共謀せるものと然らざるものとあり、その然らざるものに至つては、樓主は多く露西亞の水警と通じ、その密航船を取押へしめ、殆んど捨賣の値を以て密航婦を買取るを常とすといふ、露國官吏の腐敗を利用せる彼等の猾智、寧ろ驚ろくべきにあらずや。密航婦賣買の價格が一人凡そ三百留なるは既に説けり、かくの如くにして賣買されたるもの、年期は普通二年半とし、其間は總て樓主の爲に無報酬の奉公をなさざるべからず、賣春婦が自ら多少の貯蓄

をなし得るは、年期を濟したる後に過ぎざるなり、而も此二年半中と雖も、衣類小道具類は悉く自分の借となるが故に、年期中にこの借をなし崩さんとするが如きは殆んど思ひも寄らず、また彼等が一ヶ月の平均収入は二百留内外にして、年期を濟したる後は四分六の割合を以て配たるれども、此中より種々の費用を差引れ、手取となるもの僅かに零碎の額に過ぎる事彼我の青樓共に異なる所なし。要するに西比利亞の娼婦が多く貯蓄をなすといふが如きは、畢竟誘拐者が無智の婦女子を欺むく口實たるに過ぎざるなり、元來長崎天草邊の如きは、淫風の最も盛なる所にして、嫁資を得るがためにはその節操を賣るを辭せず、偶々西比利亞にて人の妾となり、多少の資を得て歸り來れるもの、如き、最も郷黨の艶羨を受るが故に、誘拐者の口車に乗せられ、うかと西比利亞に來るもの多くは皆然り

かくの如くにして果してその嫁資を作り得るもの、如き、千百人中の一人のみ、浴々として墮落の淵に陥り、遂に再び西比利亞の地を出て、故國の同胞を見る能はざるもの實に十の七八を占む。たゞかかる賣春婦にして實際多少の貯蓄をなし、また時には故國に纏まれる金を送り得るものは、露人若くは支那人に落籍されたるものなり、但し彼等の落籍さるゝ、支那人を最も多しとし、露人は十分の一に過ぎず、元來支那人はその國風として他に渡航するに決して妻を伴はず、隨所に妾を蓄ふるを常とし、また平常の守錢奴たるに似ず、愛婦の愛を買はんがためには、千金を散じて意とせざるが故に、その妾となれるものに至つては皆二三千の貯蓄をなさざるものなしといふ、邦人かくの如くにして外人の妾となれるものを『仕切れ』と稱し、烏港においてもその數實に三百餘に上るといふ、か

くの如き『仕切られ』はその勢力頗る大なるものありて、中には日本人の資本主となるものあり、失敗せる日本人を助くるものあり、また日本人のために富る露人若くは清人との媒介をなすものあり、西比利亞の有力なる日本人にして實にかくの如き外妾のお蔭を被るもの極めて多しといふに至つては、賣春婦の氣焔上る事一段にして日本男兒の意氣地なき事また驚くべし。
貸座敷によつて開拓せられ、『仕切られ』によつて資本を供せらるゝ日本居留民間に於て、貸座敷業者が跋扈を逞うするは蓋し數の見易きものならん、然り、彼等は日本人のために土地を開拓すれども、私利のために他の正業者を壓倒し、傍若無人の舉動を敢てし、真正なる商業の發達を妨げ、日本人の信用を害する事夥しく、其弊實に堪へ難きものあるは、西比利亞の正業者の最も嘆息せる所なり、漫に

酬業婦獎勵の口吻を洩らせるものゝ如き須らく三顧に値す。

(六)

日本の貸座敷業者は今日烏港に十八戸娼妓三百餘人(ニコリスクに十戸同約百五十人)ハ、ロフカに八戸(同約百人)ニコライフスクに九戸(同約百二十三人)ブラゴエチンスクに九戸(同上)等を重なるものとし、或はチタに、チルチンスクに、ゼイアに、一人の日本居留民なき荒涼の地も、既にわが賣春婦のその根據を形作りつゝあるを見る、かくの如くにして底止する所なくんば、遂に西三千餘哩、烏拉爾を横斷して、歐露に出でずんば止まざらんとす、その勇氣と剛膽と、眞に鬚眉の男兒をして後に瞠若たらしむ。
然れどもこれ必らずしも驚ろくを須ひず、女子にしてもし廉恥と節操とを抛たば天下また何ものゝ恐るゝものあるなし、諺に曰く男子

家を出づれば七人の敵ありと、たゞそれ女子に至つては即ち七人以上の味方あり、況んや西比利亞の如く女の最も珍重せらるゝ處に於いてをや、男子に取つて西比利亞ほど危険なる處なけれども、女子に取つてまた西比利亞ほど生命の安全なる處なし、まかり違へば節操を弄ばしむる事に依つて如何なる地か横行し得ざるなく、如何なる所か、一身を寄せ得ざるなし、かの徒らに醜業婦の勇氣と剛膽とを喋々するが如きは、所謂一知半解の徒のみ。

且露國の慣用手段として未開の地には日本の醜業婦を歓迎するの風あり、またかゝる所に來りて貸座敷を營まんとするものゝ多くは、皆本國若くは滿洲邊を食詰め來れる無頼漢にして、寧ろ本國を去る事まずく遠きを喜ぶが如きものなきにあらず、加ふるに日本の貸座敷を營めば必らず利益を收め得べきは、所謂大地を打つ槌の外れ

ざる如く、始めより明白なるものにして、正當に營まんとする商業の、前途多くの掛念に包まるゝ如きに似ず、これ荒涼肅殺の地を厭はずして彼等の遠征する所以にして、眞面目にその勇氣を稱ふるが如きは、寧ろ皮相の見たるに過ぎるのみ。

只夫憐れむべきものは、勇氣と剛膽との美はしき名の下に、頻に一知半解者流の推獎を被むれる賣春婦の身の上なるかな、彼等の大部分は皆無學無智の輩にして、地理的感念の如きに至つては尙小學兒童にだも及ばず、されば日本の何れの方角なるやは素より、自分が今何れの處にありやさへ知らず、殊に各地を轉々せるものに至つては、全く五里霧中に彷徨し、何れの邊が鳥港なりや、何れに行かば鐵道ありや、漠として知るに由なく、樓主は故らに之を秘するものも多く、人に尋ねんとするも語通ぜず、かくの如くにして且を送り

夕を迎ふるもの、内地に入る事ますます深くして皆然りといふ、世に知らぬほど強きものなしとは即ち彼等の謂にして、かくの如きもの猶且勇氣と剛膽との名を博し得べくんば、三才の童子は更にヨリ多くの勇氣と剛膽とを有せるを以て賞讃せられざるべからず。聞く彼等の無學なる、目に一丁字なきもの多きが故に、偶々郷里より書信あるも讀む事能はず、そのまゝ之を隠し置ける中に、半年乃至一年を経過し、後始めて之を讀むものを見出せば何ぞ計らん、父母兄妹の死を報ずるものなるに喫驚し、そのまゝ氣絶するものさへあり、可憐の態、眞に慘鼻に堪ずといふ、然れども郷里より書信を得るものに至つては猶可なり、かくの如きは實に十中の一にして他は全く郷里と音信を通ぜざるもののみ、彼等にあつては父母兄妹の死遂に之を知るの期あらざるなり、また何等の慘。

あゝ彼等も人の子なり、弱き女性なり、温たかなる血は血管に躍り顚敏なる心臓は人の情に鼓動す、世に慨すべきはかくの如き無告の賣春婦が、かの一知半解者流の下せる勇氣剛膽等の美名の下に妨げられて、天下またその憐れむべきに同情を表するもの少なきの一事にあり。

(七)

日本の貸座敷には日本人を客に取りしめざるものまた少なからず、こは自然かけの屑むと利益の薄きともその原因なれども、重なる理由は所謂達引をなすものを生ずるを恐るゝにあり、従つて彼等賣春婦は日夕露人若くは支那人に親めるより、はては普通の人情として全く他と隔意なきに至り、よく親切に、よく温かに、可憐なる日本女子の特質を流露せしむるが故に、日本の賣春婦は最も露人及び支

那人に愛せられ、今日にては露國の賣春婦をして殆ど西比利亞の地に屏息せしむるに至れり、されば日本の賣春婦ある所露人喜んで來り、忽ちにして新開地を形成す、これ露國政府のわが醜業婦を歓迎する所以にして、彼等は日本人のために土地を開拓すといふよりは寧ろ露人のために開拓せるなり、日本の賣春婦は實に露國の恩人なり。

余は曩に露國の貸座敷規則の要項を披覧したり、諸君はその頗る文明的もしこの語を用ゆべくんばなるに一驚を喫したるならん、然れどもかゝる法律の使行權を有せる警察は有名なる腐敗の警察なり、貸座敷よりの賄賂によりて、如何なる事もなさざるなく、如何なる不法も大目に見ざるなきは西比利亞を通じて皆同じ、こゝにおいて貸座敷の樓主なるものはあらゆる專横を逞くし、娼妓を虐使して顧

みず、かくの如き樓主の犠牲となれる最も憐れむべきものは未丁年の娼妓なり、あはれ十六歳未満の少女を駈つて、骨格長大、情慾燃ゆるが如き露國の狒々に投ず、その慘酷真に想像するに堪えたり、悲鳴の聲往々二重窓を漏るゝといふもの、これ一幅地獄の光景にあらずして何ぞ、而して斯の如き未丁年者は甚だ少なからずといふに至つて、誰か人道のため一掬の涙なからんや。

娼妓轉賣の弊はまた尤も惡むべきもの、一なり、元來西比利亞及滿洲を通じて、彼等貸座敷業者の聯絡は頗る鞏固なるものあり、その密航婦を仕入るゝや、大抵直ちに之を他に轉賣し、萬一密航婦の家族が追跡し來る如き事あるも、全くその所在を知るを得ざらしむ、或は自家の娼妓にしてその父兄に突留めらるゝ如き事ある場合にも直ちに之を他地方の同業者の許に逃れしめ、到底その影を捕促する

事だも能はざらしむ、故に一たび彼等の犠牲となれるものは、生涯墮落の淵に浮沈し、また西比利亞の暗黒面を泳ぎ出る事能はざるものにして、眞に人生慘鼻の極と云ふべきなり。
人或は曰ふ、賣春婦の西比利亞に行くもの、何れも河に海に千年の劫を経たる莫運ものにして、普通の同胞を以て目すべからざるものなりと、かくの如き言は往々余の耳にする所なり、余もまた當初に於いて多少かゝる考なきにあらざりき、然れどもその實際を見るに及んでは全く反對の現象を呈せるに驚ろけり、概して云ふ時は西比利亞の賣春婦ほど無邪氣にして單純なるはなく、所謂手練手管等の如きは殆んど之を見るべくもあらずといふ、この地にある日本の娼妓ほど欺き易きものなしとは、居留邦人の口にせる所なり、蓋し彼等の始めて西比利亞に来るや、所謂ぼつと出の田舎者なるに、その

日夕親しむ所は言語の相違せる露人、または支那人なれば、口先にて綾なす如きは素より思ひも寄らず、手練手管を積むの機會殆んど無きものなるが故に、彼等が遂に日本の娼妓の如き莫運ものとならざるは、境遇の然らしむる自然の結果ならん。
余は何れの點より觀察するもますく、西比利亞の賣春婦の憐れむべきを見るのみ、端なく異邦に来てわが同胞が斯る人外境に沈淪せるを見もの、誰か慄然として心を寒からしめざらん、何もの、冷酷兒ぞ、敢て醜業婦獎勵の口吻を漏さんとするや。

(十二) 日本人街の一夕

(賣春婦の巢窟)

八月十五日、余はニコリスクにおける日本人の、唯一の宿泊所たり

また集會所たる蜻蜒俱樂部に投じぬ。
蜻蜒俱樂部は日本人街にあり、日本人街は則ちわが買春婦の巢窟にして、一街殆んど日本の貨座敷より成る、買春婦の數百五六十人、日本人街はかくの如くにして賣春婦によつて代表せらる。
日本人街の地位は市内の要所にあり、幅凡そ十間長さ四五町、中央馬車道を通じ、その左右には多少の潤葉樹を植ゑたり、貨座敷の建物、すべて露國風なる亞鉛屋根の平家にして、長方形の家屋幾棟より成り、窓はまた道路に面して開けるもの少なからず、亞鉛をば多く之を碧にし、欄間と窓の周圍には露國的裝飾を施し、赤、青、黄、樺等種々の色を以て彩色せる、宛がら壯士芝居の道具立若くは書割をそのまゝに見るが如し、これ實に西比利亞における模範的日本貨座敷なり、旅行者はいづれに行くとしてか、日本人のある所

この種の家屋を見ざる事なかるべし。
晝の日本人街は頗る寂寥を極む、俱樂部には午後二時ごろより五六の居留邦人來りて球突に餘念もなし、午後六時余は奥まりたる日本室——怪しげなる疊の床に合はざるを敷きて、天井及壁をば殺風景なる露西亞の壁紙もて貼つめ、何の趣味もなく、何の裝飾もなき——曩にこの地に慈善演劇を催せる事ありて、その時の俄普請なりと云へる、誠田舎の芝居小屋とも見ゆる、不思議なる日本室の窓に立ちて、隣家の庭を眺めつゝありぬ、そは隣家の娼妓、浴衣掛にメレンスの帯を引下げたると、水色露西亞更紗の洋服着たるとが、面白げに薪を割り居たればなり、洋服なるは頬赤く、腕丸く、唇白の如く、振翳せる銀に力入りて、薪は手に應じ、さつくとばかり皆二ツに割る、浴衣なるは三たび銀を加へてなほ割るゝもの少なし、ト

見る中にまた桃色更紗の洋服着たるが来りて、傍へに積める薪に腰
打かけ、浴衣がけの拙なきを見て笑ふ、余の打笑ひて窓の中に立て
るを始めて見出したるは、かの桃色更紗なり、彼はあわたとしき様
にて、何をか叫やき傳へしが、これと共に残る二人は、等しく余の
方を打眺め、浴衣なるは矢庭にその鉞を捨て、家の方に驅入りぬ、
跡なるも笑ふて共に浴衣がけの後を追へり、余は啞然として暫時窓
下に立ちぬ。
晚餐後戸外に出づ、日本人街の賑へるは夏の夕暮なり、或は三人或
は五人、衣の色のさまざまに打交りて、入口の弓形の下に立つもの
廣間を徘徊せるもの、窓帷を掲げてその彩色せる窓より顔を出すも
の、側廊に立ちて植木の葉越しに街路を眺むるもの、その七分通り
は水色、淡紅色、樺色などの露西亞更紗の洋服を着たるに、髪は

赤熊と云るに結ひたる、或は桃割にしたる、中には東髪なるもあり
て、異種異様の風采まづ人を驚ろかしむるが客待顔に、靜かに暮る
る西比利亞の黄昏を、只無心に打興ずるめり。
たま／＼余の前を過去の二三の娼婦あり、怔忡として皆叮嚀に叩頭
し去る、懐しき日本人のために尊敬を拂へると覺し、憐れむべきも
のよ、われ何ぞかくの如き同胞に對して、獨り傲然たるの權利あら
んや、乃ち禮に酬ゆるに禮を以てしぬ、思はざりき、遙に西比利亞
に來りて、端なく賣春婦の前に叩頭せんとは。
夜に入りて車馬漸く多きを加へ、徘徊せるもの、露人あり、支那人
あり、空には水蒸氣低く迷ひ、十二日の月夢よりも淡く、正にこれ
烟霞青樓を籠むるの處、娼婦が聲を合はして、無心に謠ひつる、長
崎邊の漁歌、一種の哀調をなして寥廓の天地に響き來る、幽婉よく

人の腸を断つもの、危坐一夜東方の客、潜々として涙下る事數行。

(十三) ニュリスク

ニュリスクは古昔滿洲の一城廓にして肅慎の城ける處、即ち双城子
是なり、この地滿洲の關門に當り實に東清鐵道の分岐點にして、露
國のために極めて重要な都會たり、來千九百四年より沿海州の首府
となり、烏港における軍務知事の本據をこゝに移さるゝ筈にして、
やがては東部西伯利亞の重鎮たるべき運命を有するものなり。
現時の人口凡二萬、東北に丘陵を繞らすの外、三面渺々として山を
見ず、地形恰かも石狩原野における札幌の如く、その市區の如きも
烏港の屈曲錯雜せるに似ず、井然たる大區劃をなし、道幅も札幌と
相伯仲し、兩側には若木を植付たるなど未來の大都市を形成すべき

要素は既に遺憾なきを見る、只夫今日においては區劃徒らに大にし
て人煙之に副はず、家屋の如きも烏港の壯大なるに比し、之は多く
は平屋の矮屋にして遠景の甚だ美なるに似ず、近づく時は頗る陋穢
を極むるを見る、かの日本人街の家屋の如き普通露人の家屋に比し
て寧ろ大いに優るものあり、加ふるにその砂石なき道路は凸凹高低
最も甚しく、晴天の日において、牛の如き豚は道路の中央をこね返
しつゝあり、問々鶯の群をも見る、左右の人道には烏港と同様申譯
ばかりの板を敷つゝあれども、この板が果して歩行の助となるやは
疑問なり、聞く西伯利亞の都市がその人道に板を布くに至りたるは
全く往年故川上參謀總長が西伯利亞を漫遊せるの際にして、露國政
府が當時總長を優遇するの切なる、たま／＼烏港において總長が道
路の泥濘に驚ろき、隨員に向つてその不備を偶語せるを解し得たる

接伴の一將校あり、直ちに總督に申告せるより、一片の電報は忽ち
總長の行先なる武府に向つて飛び、總長が武府に至るの時、武府の
道路は既に板を布きあり、而して總長が再び烏港に歸り來れるの時
には、烏港の道路もまた悉く板を布かれありしといふ、ニコリスク
の道路も即ち當時の名残にして、東方遠征の遊子今日尙總長の餘澤
に浴す、また何等の奇縁ぞ。
ニコリスクは三方殆ど兵營に圍繞せられ、嚴然たる一城廓にして平
時常に一師團半の兵を置けるも、余の訪へる時別に四個の新築大兵
營は盛んにその工事を急ぎつゝあり、こは北清駐兵の三分の一を更
にこゝに止むるがためなりと云ふ、余が此地の土屋商店主人と共に
馬車を新兵營の附近に駈るや、土屋君馭者に向つて、何のためにか
かる大兵營を建築せるかを問ふ、彼眞面目に答へて曰く、日本と戰

はんがためなりと、無神經なる露人尙且この言をなす、豈斷味する
に足らずとせんや。
營舎の建築には日本人の預るもの少なからざるを見る、土屋君の語
る處によるに、四個の營舎の欄間は悉く日本人の受負にしてその額
二萬留、爲に入込る日本の大工五十餘名に及べりと。
ニコリスクに來るもの、必ず登臨すべきは此市の東北を限れる丘
陵なり、この丘陵や、大陸に特殊なる極めて緩漫の傾斜よりなり、
牧草野花之を蔽ひ、放養せる牛馬豆の如く小なるを見る、頂に上り
て東北を望めば名にしよふ西北比利亚の大平原、漠々として瀟望涯際
なく、烏蘇里鐵道の線路一直線に天を指さし、其盡る處を知らず、
長空澹々たるの邊、孤鳥飛んで宵冥に入去る、かくの如きの大觀日
本にあるもの、想像だも及ばざる所、近く眸子を轉ずれば、綏芬河

透迤として緑蕪の間を流れ、ドビンスケに通ぜるの道路に當りて、
五個の眼鏡を有せる石橋の架せるを望む、この石橋もまた日本人の
營造する所に係るといふ、東部西比利亞の地到る處日本人の紀念に
充つ、希くは多々益々かくの如き紀念を分布せしめよ。

(十四) ニコリスク停車場

八月十六日午前十一時半、ハッロフスクより今ニコリスクに来れる
烏蘇里列車は、將に余等に乗せて烏港に去らんとす。
ニコリスク停車場は烏蘇里線中の大停車場として知らる、されど構
内は頗る整頓の觀を缺き、四方殆んど開放しにして、宛がら何れよ
り來り何れより去るも妨げざるが如くに見ゆ、雨ざらしのプラット
ホームの一端、線路に添ふて設けられたる長き櫓には、垢汚みたる

白衣を纏ふて長煙管を啜へたる朝鮮人、鼠色に變色せる青衣を着た
る支那人、三々五々長き列をなして何を待つともなく、よし烏蘇里
列車が目の前に轉覆せりとも、彼等の身にその災の及ばざる限り、
その腰を起すべしとも思はれざるまでに、悠々然として腰打かけ、
呑氣に汽車の乗客を眺め居るは、殆んど何の意味なるかを知るに苦
しむ。

別に驛前に据ゑられたる櫓には、レリスをもてその頭を包める美は
しき赤兒を乳母に抱かして、セツばかりの美目よき可憐の女兒と
共に腰かけ居る貴夫人あり、その夫なるべし、若くは友なるべし、
青黒き軍服に肩飾着けたる逞ましき男立ちて之と語りつゝあり。
プラットホームを徘徊せるもの、帶劍の人最も多く、いづれも美髯
肥大の軀を豕の如く運ばせ、傲然として歩み去りまた歩み來る、別

に取締の憲兵あり、國事探偵の類やあると、鶉の目鷹の目もて逍遙
ひ居れども、かの支那人朝鮮人等には敢て關せざるもの、如く一瞥
をだも與へず。
停車場の埒に倚りて、物珍らしげに列車を見物せる哀れなる露國農
民あり、單調なる生活と、寂寞たる長さ冬とのために、馴致せられ
たる陰鬱の風采と、その生氣なく鬚のみ赤き容貌とは、その揚々と
して構内を濶歩せる軍人と兩々異様の對象を形作る。
再びプラットホームに返らしめよ、こゝにはまたハイカラの青年紳
士と花の如き令嬢とが人を見送り來りて喃々せるあり、馬賊のモデ
ルとも思はる、炯眼赫面の鞞鞞人の徘徊せるあり、驛夫に叱咤せら
れて狼狽する支那人あり、その赤、青、紫等彼等の好み用ゆる單純
の色に包まる、露國婦人あり、これ等のもの總て紛然雜然として軍

人のユニフォームの間に右に左に動きつゝあるの光景、蓋しこれ露國
にあらざれば見るべからざる奇觀なり。
余等の列車に入れる時、錫の鑼を前に下げたる黒衣の尼僧あり、余
の前に立ちて寄捨を求む、之に十哥を投ぜしに喜んで謝し去りぬ、
余と相對して席を占たる美人あり、その風采よりすれば蓋し我邦に
おける蝦茶式部の亞流なり、今しも食堂より林檎を携へ歸り、何事
ぞ皮のまゝにてそを噛り始めぬ、余はナイフを貸し與へんとしてボ
ツケットに手を挿さみしが、流石に取出しかねて、そのまゝ傍を向
き、ツト立つて窓に近づけば、窓下のプラットホームに花賣の娘あ
り、赤更紗の頭被を被むれるが、足は素足のまゝ、野の花を美はし
く束ね、球とせるを四ツ五ツ持ちて列車を仰げり、その一束を購ひ
取らす、價二十哥。

これも素足に赤衣を纏へる酒賣の媼の、大いなる籠にオホツカ酒の
數瓶と露人の喜び食ふ黒パンとを入れて、賣歩けるあり、只見る汚
服の露人列車より出て、その一瓶を購ひ、栓を抜くより早く瓶に
口當て只一氣に飲干し了りぬ、露人多くは皆彼が如きの豪傑なり。
やがて驛前に釣られたる鈴は不潔の老驛夫によりて打鳴さるゝ事二
三聲、こは將に列車の發すべきを警告せるなり、列車より下りて徘徊
しつゝありたるものは、いづれも三段の足踏を攀ぢてその高く大
いなる金庫の如き列車に上り、見送のものは態度を改めて立ち、憲
兵は遂にその餌食を得ずして劍を按じて陥止まり、花賣の娘も酒賣
の媼も共に立去りぬ、獨その長煙管を弄せる朝鮮人と、手持不沙汰
の支那人とが、依然として其懶げなる態度を改めざるを見るのみ。
既にして第二の鈴鳴れる時、一聲の汽笛列車は凄まじきパツフをな

第 貳 編 終

して徐々進行し始めぬ、構内二三の土運車に土を盛れる上に、朝鮮
及支那の勞働者が炎天に曝されつゝ、午睡の夢を食ぼれるあり、列
車がこれ等土運車の前を過るの時、之を隔つる白樺の植込の傍
に、亞鉛の家根を碧にしたる停車場附風の建物の戸口に、淡紅の衣を纏
へる婦人、繪の如く立ちて列車の去るを目送せるを見る。

菊池幽芳著述目錄

己が罪 全三冊

一個可憐の少女が運命の妖嬈する所となりて、所謂己が罪に懊惱せるの態を描く、高遠健全の思想に充ち、深刻精緻の描寫に富むもの、これを本編の特色とす。あはれ此少女が點せる眼晴の火は其觸るる何ものをも燒盡さずんば止まざらんとす。血あり涙あり、讀者が膈裏の琴線に觸れて善く鏗鏘の音を發するものは必ず本編ならん。而して己が罪に於て著者の最も力を極めて描寫せむとしたる處は中後編にあり。一度順境に立ちてやうやく舊き傷を忘れんとしたる環が身邊に、忽ち起る房州海岸の悲劇、續いて西貢病院の對面の如き、何ぞそれ沈痛にして悲惨なる、罪に觸れるものよ、同情の慰藉を得んとする者よ、乞ふ來りて此編を讀め。

前編(十一版) 富岡永洗 郵税四十六錢
 中編(七版) 阪田耕雪 郵税四十五錢
 後編(五版) 武内桂舟 郵税四十六錢

若き妻

女を愛せんと信する理學博士と、無遠慮なる無邪氣の少女と常に懷抱を懷にせる御殿女中と、佛蘭西歸りの貴族と、洒落なる工學士と、雙兒の二少年とを捉へ來りて活潑自在、其間の錯綜せる纏綿の情緒を叙するもの、其多情多恨本編の如きは蓋し少からん、異種の人物と異様の描寫との性格の相異を描けるの筆宛然紙上に躍動す。また以て文壇の珍となすに足るべし。

二人女王

本編は有名なる亞非利加通ハッガーの傑作アラン、コアターメンを譯述せるもの、原書は實に探險小説の白眉を以て稱せられ、殆んど端限すべからざる驚騰にして怪奇なる著者の想像力は變幻極まりなき趣向を生じ、一たび巻を繰れば終未だ讀過せざれば安んずる能はず、探らんとして赴ける冒険者あり、幾多の奇怪なる人問の空想以外なる自然及び人事の驚ろくべき出来事は女王を發見し、遂に目的地に到達し、如姐花の如き出入るに夢幻不測の想像力と縱橫美妙の詩趣とを發揮せるも本編の特色なり。

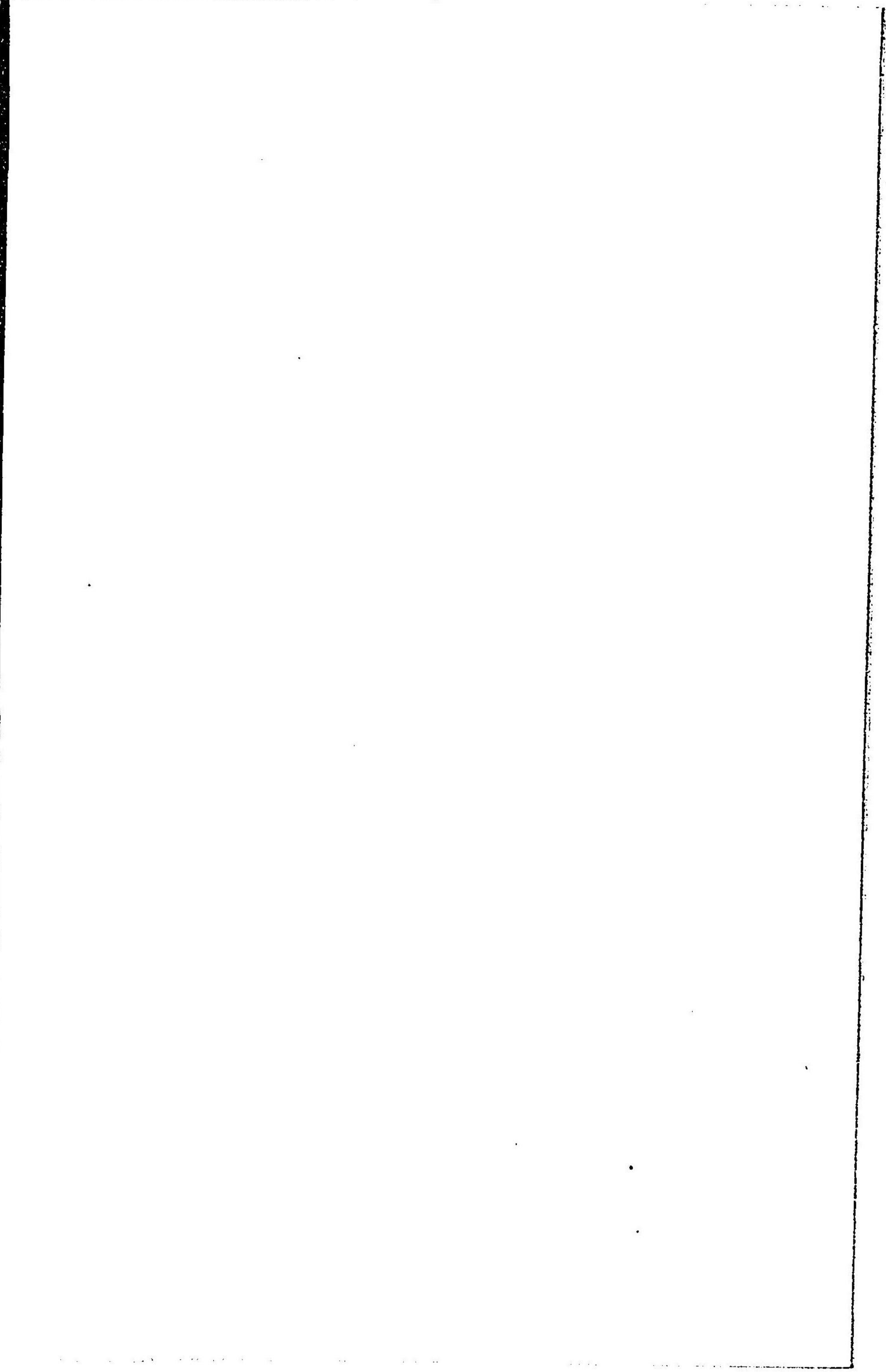
明治三十六年七月十一日印刷
 明治三十六年七月十三日發行

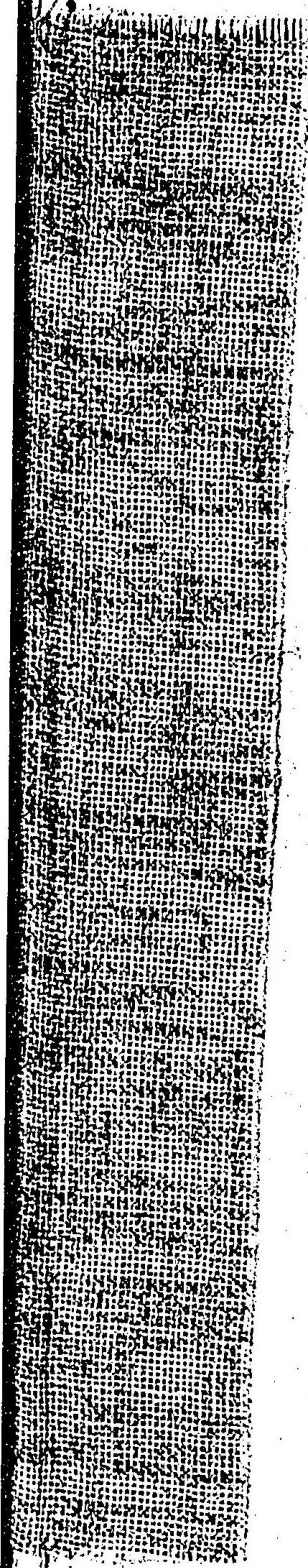
日本海周遊記
 定價金壹圓



著者 菊池 清
 發行者 和 田 む 免
 印刷者 佐 久 間 衡 治
 發行者 春 陽 堂
 印刷所 株 式 英 秀 會 社
 (電話新橋 十八番)

東京市日本橋區通四丁目五番地
 東京市日本橋區西紺屋町二十六七番地
 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
 (電話本局 五十一番)





60
11

675

415

022747-000-2

96-275

日本海周遊記

菊地 幽芳(清) / 著

M36

ADB-0535



